竹取翁物語

四

竹取翁物語解卷第四

飛驒高山　田中大秀　著

帝國文庫

蓬萊の玉の枝

かぐやひめ石上麻呂に、蓬萊の玉の枝をもとめさせたまふ。

〇石上の麻呂ハ姓の下の字を付て訓べし。抄本ハもろつらと類本よまろつらハ誤り。其外の本どもおろつりもろつりなど皆誤り

と今改つるよしハ上ニ委しく云つるなりハ妻屏の段ニ麻呂ぐ〳〵
みをるなりと誤るよりるなりおぞを名と心得て此も脱るなりと思て猥
ニ補ふるなるべしバ今削去つハ字ハ類本ニよれり○家ニつるる
ふるのことどもハ大伴大納言の我家ニ有と行る人を召集て宣ひ
し同意を此ハ詞を更て語ヲるなりさてはらるるハはるのふるる
の約ふ〳〵云と同じく男共の方ニ就て云言なり中納言の使ふ方
なり
ふと云るるふあるべ○燕ハ巣くひるるべハ和名抄ニ孫愐切韻云
鳥巣在穴曰窠音科在樹曰巣音曹訓須一云須久末。宇治拾遺巻六ニ鷹の巣咋るる
を見付て〳〵なるる鳥の巣造をすくふ〳〵云ハ木枝ニてなど塩土など
ハ咋持来て造ハバ然云なるべし○まて〳〵ハ諸本や〳〵又用など誤を

ふ下ニ従て改つ〳〵ハ料字の音なり字書ニ連條切量也度也數也
云又人物栽質也杜甫詩山色供詩料俊陰巻ニ右大将景政北山の空に迎ニ物しるふ処ニ
女の料ニ袿一重小袿差貫子ハ料ニ絹の差貫摺狩衣袿袴など裏に
入〳〵云などなり○子安貝ハ類本古板本ニ何處も〳〵子安の貝と
の字なり抄本此ニハなし末ニ有処も何り今ハ无き本をとりつ
をるとども答〳〵ハ〳〵ハ巻るとあるるこ〳〵ハるたるるも
猪ニよなるハものなりるめでしこ子うまるよるまいのでういぶまん
もるるくうと申人ぶるニ又ハばうもぬとまるん
○鷲を数多殺〳〵と見るるよぶるるもハ男共子安貝ハ腹中ニ有物と心
得〳〵かく申なりニ字類本に従て加つ○但しハ徒〳〵云言の轉るる

意この字書より但徒亶切徒也凡也任從也又空也云〻本訓褐偏脱衣袖也
借為語辞とあり言意ハ凡と云より似たり○子産と紀云〻ハ腹を割て
見ても然云べき物ハ死りたる子産てハ何様するとの出たるも
となり○たゝくゝと申此言上四字類本てハたゝくゝう一写本たゝ
くゝの字なし古板本たゝくゝる校本たゝくゝとあり抄本普本てハ此四字
なし出たくゝと申と読たり必誤字脱字あるべし左右より考たるも未思得若ハ
と申の三字衍まて一写本のたゝくゝとある宜しくて巣より集たる燕
ハ人より怖て飛散さまなくんとの思ふべ猶言てゝ心ちに故又按
まはたゝくゝめと申ものハとみけんをたを脱しくらを下上より又くゝハ
もらハくゝまめをこのまの誤下よりものハを脱するもとかくんこの是ハ
乱ふ字なり

試より云ふとさたるべ善本を得むまで姑く然訓おきてんのし○人ゝ
より見るとハ燕ゝの人を又たるハ驚て失去なり燕を人ゝの見ると
云意ハとかくゝ
又ひたゝたまくゝたやゝ於ゝかみゝ飯のゝ屋のむゝ
たゝくゝのあるとまるハすくゝひたゝりそたるまゝ足なくゝまをのの
こゝもびみくゝまるまて「のゝ」をゆひくゝあゝくゝこのゝハをまるう
そくゝたるまるふうまゝゝむやハさてくゝてゝたゝくゝあるとまくゝた
○大炊ゝのそたハ和名抄より大炊寮於保為乃豆加佐くゝのを。按より大飯の義ホ
ちハ假名於保比とみるべきを為くゝあるハいこのゝ傳写の誤このと思より
扶桑畧記ナ七より一條天皇寛和二年十月十日圓融法皇幸大炊河云〻と
作るを日本記略てハ同叟を遊幸大井河云〻〻即都西の大井川な

と當時既くに比と爲と亂くに聞えしの又比と爲と通へふ例あること紀
爲と通ふ例ハあり未考○飯のしくハ飯を調を云と今俗ヨメシタクと云ヨ
同じ炊爨をかしくと訓字鏡ヨ燀之善反上炊也 熬五高反煎也煎魚伊比加之久 鳥菜等也尓留又
伊盭五到反熬也熟飯也奈戸又加志久留と云くふりと○屋の棟ゐたくのあなどくに燕
巣すくひさぐと云ハ活本ヨたくをたくくとあるも鮮べこのくに諸本さぐ
るとあるを今改つ今世たくと云物ハ柱の外ヨ屋の頃るなどくに
支ふる物を云と其くハ非じ又たくハたくの誤ヨくに和名抄ヨ功程
式云東柱豆賀波之良くにある其の穴毎ヨハ屋を建る時東柱ヨ穴を穿て
立て後ハ不用ヨて大仏殿の柱の穴の如くを物欠さたと燕ハ穴くハ巣くふ物
にあくに。故狩按ヨ燕ハ巣ハ屋の内ヨて梟の上なり然ハ壁ヨ烟を

出に穴ヨて燕も出入ヨ便よくたが其を擾ヨ穴ゐくくに巣くるる
なくに。其ヨ就く按ヨ飛騨山中ヨくに農家ハ屋の梁より上
ヨ簀子を敷くに二階の如く搆くに冬ハ烟草など乾ゐくに類の物
を置夏ハ蠶を飼処をたしと云と若ハ古代くに梁より上を云名ヨ
く敷物なき屏をもたしと云けもの梁より上なたバ棟近き処ヨく
軒の方くハなしさたバ屋の棟ハたくとも合ひ烟を出に穴も有活
き處なり 火爐の上ヨ釣ヨる物をあまと云古名も斐太ヨ遺くれバ其より上の処をたしと云も古名ヨて たくハた
しの誤ヨも有くに○まめなくに男ハ繼躰紀ヨ 元年天皇敬憚頃を奉迎使
心委命墓盡忠誠とあくに忠誠ハ公ヨ仕に心正しくに真実を尽に意ヨ
と。又遊仙窟ヨ斂色言ハ正其顔色有嗅容也 をまめくに真成不謾真成也語也正首狩真成也をま

めやのと訓るハ戯て居るもしゞ腹立て容を改心を正しくする俗ハ真皃
ハ成と云如くハ〳〵異意なるゞ如くなれゞゞ正しくひる意一ッハ〳〵忠誠も
同意なり奉公ハ誠をて正しゝ〳〵むを男をとなり○率て罷くハ此も
行方の賤ハ〳〵あ〳〵ゞ人を敬〳〵罷と云ヒ○ゝのゞゝを結くハ
抄本て字なし古事記ハ胡床まハ呉床〳〵ゝを〇ゝゞゝと訓ヒ。和名抄
座臥具ハ風俗通云霊帝好胡服京皆作胡床此間名阿久良。縣居大人揚座なゝ
むと云ふしゝぞ此ハ常の胡床まハあ〳〵で燕の巣ゝ下に假ハ揚り
居べき處を繩以て結く作まるなり即ゝのなゝひと同物なるべし○
ゝのゞそせんハ今祠ハなりうのゞふハ徒ハ見ゝハあ〳〵で何ハ
らゝと其様体を密ハ見る意なり。竊祠を常ハいうのゞふと訓をか

いまこゝゝも訓るまて知べし。古事記大宜津比賣神の段ハ立祠其態爲穢汚
而奉進〳〵ゝゝ〇そゝゝゝ燕子うまさゝひやハ類本ハ子をと
ゝのりを字充ても宜し。多の燕あれば其中ハ子産のも無ゝハ非じ
と云なり○さてゝゝハ然爲てゝなり
ゝゝゝ

と活く嘲咲方とし面白き方響る方ハ於むのしの略ゆゑ於とのしと
可書と田中道麻呂の説ゆ役て師ハ定られつゝ今ハ蜻蛉日記ゆ
をのしを岡ゆ云懸るによりて嘲咲も歡笑もをのしと云ハ唯笑
こゝろよて何ぞも同意〻て然書つ是ハ人〻の論ゆ役て思定つ笑を爲むと云言
ぬ爲ぬと云ハ同意なるべバ其ゆ准ても知べきなり○そゝもハ道理
ゆ合〻諾する由ゆ云ゆ。玉篇ゆ尤甚也最也勝也最也極也ゆ字をモツトモ
と訓ゆ○えもゝざりけるゆハ中納言かゝるよき方便ハ未寄思しとか
ゆ○きよゝハ興字の音なり。字書ゆ虛凝切起也盛也尚也〻〻も師云
漢音キョウ 呉音コウ 上のをゝ〻に更ゆも有哉と宜つる同意なり。土左日記

二月九日渚院の条ゆ今與ある人所渚院ゆ似〻る歌よめと〻ゆり○ゆのなゝひ」
ハ續紀の慶雲三年元明天皇即位の詔ゆ是以親王始而王臣百官人等乃浄明心
以而弥務尓弥結尓阿奈〻比奉輔佐奉年叟尓依而志此食國天下之
政叟者平長將在止奈母所念坐ミ師の解卷一ゆ云く阿奈〻比奉も輔佐
奉〻同意の言と聞〻りかゝて言の然云本の意を考るに足荷な
るべし凡〻足ハ人ゆも器ゆも下ゆ在く掲支持物なり荷ハ物を掲
持を云俗ゆハ拐の両端ゆ物を著て擔とのゝ尓なゆとハいひてゞも
其〻ハ限らざる叟なり。かゝまバ此言ハ物の足に掲支持の如く臣
の下ゆ在て君を輔持を云なり。和名抄造作具ゆ麻柱阿奈〻比道麻呂云
麻ハ庇の誤なるべし 小右記長和四年造内裏の叟を記さゞる処ゆも安奈

奈比結とゝり昱名ハ今世ヨ足代と云物と聞てつり麻柱と書る字
ハいとのなゝまとつゝ絲ゝも足代ハ扶揭て下を支持物なる故ぞ所
なゝひ云名ハ負つゝまゝと云ふき。又今昔物語舊本廣澤寛朝僧正強力
語ヨ仁和寺の別當ヨゝ御けるバ彼寺の壞ふる所を修理をんとて
麻柱を作て日毎ヨ匠ども數來て修理しけるヨ云ゝ盜人我衣を剝ぎ
ゝしきまゝバ盜人ヨ尻をふゝと蹴ふりつゝバ其盜人ヨ蹴らるゝ侭
ヨ俄に失ぬるなり云ゝ僧正彼ハ黑く裝いつる男なりと宣へバ人數
麻柱ヨ上ヨて見ヨバ麻柱ヨ落をりて可動樣もなゝて云ゝと抄の頭書
ヨ所り○揚居ら所ゝつるハ下天羽衣の段ヨ番にすゑて守ゝ。伊勢物語
五段ヨ夜毎に人と居て守ゝを見ヨバゝゝに同じ

殿ゝり使ひヨ所ゝ人ヨとゝせゝゝ見ゝゝるこゝ所ハせ
ゝるヨふヨぞゝゝゝ足も人の所ヨ多のぐるヨ居ゝふゝ所ておどて巢ゝ
のぐりこゝ。

○使隙なゝハ甚ハぶつのなゝ待こゝ所ふゝ使を打頻て賜ゝんな
ヨ○ゝゝゝも所ふハ使をゝて令問所ヨなり。抄本に此のゝせとゝハ
同字を向と足て誤なるべゝ○ねぢてハ字鏡ヨ忙怕急勢也於比由
呂毛止奈加留。按ヨ又於豆又已ゝ
豫ハ驚字の誤ニ
ゝ聞ヨ所バ无ぞよのゝる○のぐりこゝ。ハ古板本にのぐりゝゝ

ゝあるもよ所し
かゝふよしの所ヨ。ま中を申ヨ所バ聞ゝるよゝいのゝ所ヨ。

おぼしめしをぼしめしふかのはこのもとに女人たちまゐりまゐりて
翁まゐりやう子安ごひとりまゐりて
きまゐりまゐり御ぞうぞうの給ばかり御ぞうぞうの給ばかり御ぞうぞうの給ばかり
○御返事を申給ばハ諸本御字なし抄本この〳〵し古板本申給ば
〳〵今ハ類本ハ従て補ツ○おぼしめしハ類本ハ従て補ツ○おぼしめ
ハ中納言此度ハ深く心を懸ぬ〳〵片時も早く貝を得ん〳〵思食ハ
思ひ〳〵如くもあ〳〵ふ〳〵心を苦しめ悩ふなり○かのつのさ官
人ハ抄本ハかのを脱ヲリ彼ハこのさハ大炊寮なり○こゝほおろハ
鈴木氏云此翁ハ名ハ〳〵ハ〳〵ぞこゝのこゝを取るこの石作王ハ
石鉢ハより月の岩笠ハ月の都ハ由ゆゑ聞ゆと云給ふるハ就て按

ハ法ぞこゝを下上ハ爲ふるなるべしさてハぞ字なるまじくもおろ
のハとぞ〳〵音通へぞをを畧ふるなる○申やう〳〵云〳〵ハこゝろ中
納言の御殿ハ翁く申詞なり○ひゝをを合をく〳〵ハ親〳〵く物語〳〵ハ
ふさはしかり。和名抄ハ揚雄方言云額五百反和名比太比東齊謂之顙蘇朗反幽州
謂之顙五各反。俊陰巻ハ入唐の別をしまし処ハ父母〳〵しうげ悲しと思やるべし
三人額を集へ〳〵血の涙を落して出立く云又石作の処ハ嫗翁子ども孫
など居てかゝべを集へ〳〵木を切こなたなど同じさまなり
こゝほころこの申やう此翁ハ子やたごひハのしくゝゐぼこの
てゆゝを祈ふなるまさてハえゝをゝをゝあゝふまゝじあゝひハ
ぞこゝ〳〵〳〵廿人のひゝをたのぼりゝ住まバのハ〳〵ゝ。

まゝでこびなる

○何〳〵ゑぐり〳〵ハ子安貝取ばゝ謀の惡き〳〵なり○えゝ〳〵せ」ハ類本ハえゝ〳〵させ〳〵ゑハ術の○おぐろ〳〵〳〵ハ驚く計り甚〳〵意〳〵聞也。帚木巻ヨ絵の東を人ハ不見及蓬來ハ山荒海の怒まる魚の姿漢國ハ烈〳〵獣の形目〳〵見えぬ鬼乃貌なぐハぬぐろ〳〵作る物ハ心ヨ任せ〳〵一際人の目を驚かして云〻又馬頭ヲ話り指一を引寄て咋〳〵ハ〳〵をかぐら〳〵〳〵〳〵〳〵云〻なぐ何り○廿人の人。ハ上〳〵ハをびハ古板本ヨ役〳〵人のを補つ類本ヨ人〻の云〻ハるなハばハ〳〵ハ衍なるべし。上妻問の段ヨ五人の人ハ下天羽衣の段ヨ二千人ハ人を〳〵を格なり。俊陽巻三丁ヨ三人ハ人並居〳〵琴を弾ハふ四丁三人の

人問〳〵云〻十三丁七人の人皆礼拜〳〵て申さ〳〵なぐ何り○あ〳〵て〳〵ハ何らびあ〳〵ぶ〳〵も云〻疎く遠離意なり。古今集恋四に伊勢故郷ヨあ〳〵ぬ物也。我爲ヨ人ハ心の何〳〵て見ヨ〳〵ぬ。万葉巻二ヨ日並知命薨後舎人の哭り〳〵島宮池の上なる放鳥何〳〵びな往て君不坐〳〵十二〳〵ひとの白濱波の寄もあへぬ何〳〵ぶる妹ヨ意つ〳〵でをるなぐ〳〵ゑる。恋ハ人ヨ怖〳〵寄ぬをゑり○よるまゝでこびなる」ハ抄本ヨよるなし同本こびなり〳〵ゑとなん」と改つ類本写本〳〵ハなりなしよるハ巣ヨ依著なりまゝでハ中納言を敬〳〵云る叟上四丁ヨ罷と云る同じ格なり

せそゝもゝふべきゝ〳〵ゑと此あ〳〵ひとこぼちて人ハちまるぐ〳〵て

まゝなゝむ人ひ〳〵ハ何〳〵こに義すゝ〳〵緒をかまゝ〳〵

[illegible]

○こぼちてハ先ヨ結ヒ造リし麻柱をゆゝむを云ヒ。万葉巻八ヨ忌部首黒麻呂歌 秋田苅借廬毛未壊者雁鳴寒霜毛置奴我二俊陰巻ヨ俊陰死人後ノ

もなほあれのりと思ひ〳〵万の往還ミ人ハ屋共もこぼちすつまバ

枕冊子巻五五節の局を皆こぼちすつして云云なゝ狩下ヨ云ハ

し○人皆ちりぢりに〳〵ハ古事記ヨ退字をさりぞき〳〵訓傳十四ヨ

ハ遠離〳〵より後方へ曾久を云〳〵なり。土左日記二月五日の条ヨ

もゝげどもさり〳〵さぐきヨさぐきて〳〵ハ字を略ふるなり。さ

く此ハ中納言の方ヨ付て云処なれバ云〳〵と云ふ処ぞ〳〵

云ヒ〳〵と鈴木氏云理ハさる事ぞのら文詞〳〵ハ如此事も有べき歟

下ヨ麻柱をこぼし人皆帰ヒとあり〳〵来ぬ〳〵ハ理もて云バ人皆か

へしぬひぬと不云でハ違ふ〳〵と云ふき○人一人をハ類本一人ヨ

し○ひの〳〵こハ抄本ニ字をたゝ誤まり。神代記一書ヨ鹽土老翁云作大

目鹿籠内火〳〵出見尊於籠中投之于海云〳〵。古事記中巻の末に取其伊豆志

河之河邊之節竹而作八目之荒籠〳〵と傳ヨ何ら〳〵ハ目の疎きを云

〳〵ふ○ひのびたハ古板本間ヨ〳〵作抄本ヨに〳〵もゝらし今ハ

写本ヨ役つ○綱をつりひのびたりせてハ按ヨつりハくりの誤なるべ

く籠ハ釣と云へぶと綱をとと云くハくりと不云ぐハけぶこの〇バクリ
と訓つ。和名抄蠶絲具ヨ唐韻ニ云緣訓ケ流絡絲取也とも云ふ繩葛なぐれ
類の歌ヨ來るヨ兼くよめる皆是なり〇ぢくもなん」ハ抄本ヨ從ひ
ちのぐ類本ぢなん」とも今ハ活本ヨ從つ〇いやくよの夷なり」ハ承引ふ
る答乃言なり。さて此ク彼廿人の者どもハ麻柱を壞て帰べく仰度
しぢふ吏を略くり故次の詞彼者どもの心とちつる如く聞ゆえり
中納言ハ方ヨ就く云すくハ麻柱を壞ふをく人皆帰ふをぢひぬと
ゆべき処なり〇何なく」ひとこぼちて」ハ諸本こぼし人皆云くとあり
し字ハちを誤下まて字を脱をるの。此言放と同格ヨく言の八衢ヨ
所謂左行四段こぐし　ちなし　と多行四段こぐち　ちなち　と活用くり故先をそな

ち矢をそなつ」と云ぼよをそなしもなん」と云く冠しのくんやえ然サ
もバ此も必こぼちてとゆべきと上のこぼちてヨ同し。さて此言
ものづつなる時ハ良行下二段の活こぐる　こなる　ちなる上ヨ
引くる今昔物語ヨ彼寺のこぐる所を云。大和物語ヨ俊子ぞ宅こぐる
ちくる家ヨく。俊陽卷ヨ　こぐ　こぐる部のもとヨ。甲六十二屋も皆こぐる
ちちち

[illegible]ハ子うまれ[illegible]ハ尾をさゝげ[illegible]
[illegible]なる[illegible]なる[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
○宣[illegible]ハ校本ヨリ[illegible]ハ字を補フ○尾をさゝげ[illegible]ハ類本さげて[illegible]ハ漏るなり○産み[illegible]ハ俊陳卷ヨリ仲忠生る処ヨリ[illegible]ハ即嫗已ノ衣の懐ヨリ抱き[illegible]あり○引上て[illegible]ハ籠をなり○[illegible]申ハ写本ヨリ[illegible]

きゝあるハ辞不調○[illegible]ハ貴人のさる所へ物を[illegible]て賤
紀男君ヨリ交ハ[illegible]ハ似ばなけまハ甚く忍ていまもしなるべし○
[illegible]ハ写本ヨリ校[illegible]る本ヨリ[illegible]て[illegible]冥し○夜を晝
になし[illegible]ハ顕宗紀ヨリ播磨國司伊與來目部小楯[illegible]適會縮見屯倉首
縦賞新室以夜継日住吉物語ヨリ姫君住吉の尼を迎ふる処ヨリ萬を捨てよるをひる
になして参ら[illegible]と暫の隙もなく不怠[illegible]ハ男君に令取ふなり。さて此の文古事記の須佐之
男命の御あ[illegible]びの段ヨリ猶其怠態不止而轉と云置て次ヨリ其御爲態
を記さ[illegible]るヨリ似たり
[illegible]

[illegible]

○悦[illegible]ハ写本ニ役〻補ツ○此ニハ[illegible]人ナキニハ中納言の仕人ども[illegible]を子安貝取難ニとあるを[illegible]を奉[illegible]相議[illegible]するを甚く喜ぶなり。前の龍の玉取ニ行しハ仕人なるすゝ便く出立ざりしニ対〻るなるべし○願をかなふる吏[illegible]ハ誤なるとハ此謀ニ依く赫映姫を得ぶくんの願ひ叶べきことを悦ぶ由なり貝を得ぶく[illegible]ハあべ。吏の意しさと結べふ語格宇治拾遺巻敏行ニ夢ニ見

く友則三井寺の僧ニ許ニ行し処〻かく[illegible]る吏の嬉しさと云〻〻行る全く此ニ同し歌ニハ此さ字多し万葉巻三ニ[illegible]る[illegible]川音のさやけき瀧つ瀬毎ニ。古今序ニ咲花ニ思付身の何ぢなき身ニ痛の入も不知て。後撰十四ニ逢さのうなくてのこるる我恋を人目ニかくる吏の悲しさ又ごのさと云るも同格なり橋姫巻ニ後世をさくふぐり知ぶ[illegible]むごの有難さ。古今十三ニ現ニはさも[illegible]の夢ニさへ人目を守〻見るごの悲しさなど歌ニも詞ニも多ども○御衣ハ[illegible]と訓べし。祝詞式ニ御服春日祭御衣平野祭と書[illegible]と訓ど。袖をそで衣手なり衣桁をそでのけ催馬楽高砂と云そも昱なり○かづけハ令被なり字音ニ禄ロクと云ど玉枝の段可考。谷川氏云琵

琶行ニ纏頭をかづけものと訓ヒ被物の義なり。下学集ニ纏頭遊伎之賄也と云々。衣類絹綿など上より賜ふを打被て座を立ヨリ
と云名なるべし。大和物語ニ亭子帝鳥飼院ニ玉淵の女ニ物ヲ問ふ処ニ
袴ふぶく是ニ物脱てかづけ者ハ座をたちぬと詔ふ
ひたバ皆かづけたるたバ被き餘て二間ばかり積てぞ置ちける
ばかりの○さらにハ字書ニ変古行切音庚隷省作更代也復也改也と
あるさらにと訓ヒよハ復改の意なり○夜さりハ伊勢物語六十六段ニ
朝ハ狩ニ出立てやり夜さりハそこなる帰てせたる。催馬楽ニ
朝ニ取よ〳〵さり取云〳〵ものさりハ春さればバ夕さればバのされニ同
じかるべし 拾遺ニさればを万葉ニ之在者と書ふるをどさりと同言ニ
〳〵共ニ時の意と聞ふ斐太ふく〳〵あしらうあさぐ〳〵と

なぐ〳〵いつと○此ことのさまよ〳〵ぐこと〳〵ふ此ハ彼と云意なり
歌ニ是や此ふたぐこと〳〵と云る皆彼の意なり。ハ来きよと云意な
ニ次下ニ紙燭さして来とあるも同し。此衣脱てハ賜ふハ中納言の御殿
ふ〳〵ふ吏なりふ〳〵ほまろハ大炊寮の官人ふハあたど昼夜寮ニ
こ居ふハあ〳〵ぐ自ぐ私宅も在て帰ふるなりなる又更ニ今夜
彼寮に来て此貝ふる態を助てよと宣ひて衣ハるびつるなり○
ふたのそ〳〵つ〳〵かきぐ家ニ返し遣つなりと鈴木氏云たき。伊勢物語
八十二段ニ御送〳〵て〳〵いかなるを思ふニ大御酒ふまひ禄ふまてを
〳〵ふたのそ〳〵ぐ〳〵ふ〳〵ものと
ぬ〳〵るぬをバ彼ふたのそ〳〵に〳〵て〳〵ふ〳〵ふ菜に

はせ給ふ。中ごろ屋をさしげて回るなりのことに人を除き給ひ拂させ給ふ。菜ゑまぜさし入させ給ひ拵るに物もなしとまゐらせ。中納言ハ物なくなりぬるのち於ぬえ給ふ。のぐるのぐるとさぐるなりと宮まゐり給ふ。姫のぼりてこのびゐ給へるゑ尾をさぐいめぐるゑ合せ給ふまをさげて探給ふ。手にひかめるものをとる時に物ふぎりて今ハ知らしてとゐ給ふなりと宮まゐりて御まゐ給ふ。さて御をとりて給ふ。のうへゑ乃ゑさ自ら義給ふ。

○日暮ぬれバ彼寮ゑ於ゑ給ふ。上ゑ萬の人ゑ知ら給ふで密ゑ寮にいまして給ふる即是なり中納言先ゑ來給ひ御帰給ひ今又更に来給ひ給ふ。

○誠ゑ」ハ抄本ゑ字を漏きり○燕巣つくり給ひ」ハ前ゑ密に寮ゑいましと給ふゑ此に夜しも燕の巣作るを始て見給ひ給ふゑ如く聞ゆるハいで又ゑつ麻呂ゑ相議を喜び給ふ。其時ゑ給ふ禄ハ賜ぶゑ附なく中間に賜ゑ給ふ。按ゑ中納言ゑ給ふ。夜を日ゑ成て今取給ふと云ゑ書續け給ふハ例の先ゑ相議を悦び給ひ直ゑ其態云置文法なり此吏上ゑ云ゑ御衣を被給ふも中納言の家ゑ行吏又麻柱を壊つ吏も其を諾ひ給ふ処ゑ直ゑ書つぐけ給ふなり燕ハいつなふ時ゑの子うむ。問給ふも別時にあ。日暮ぬれバ寮に

ゆゑ〳〵てこのうも密に寮にいまゝてこゝに共に同一時なるを再度云るなるとけり　さるゝど燕夜〳〵立回く　○こゝつまゝ「の下」の字ゆゑ子うまん吏覚束なし

まゝりし若ハ脱さるゝ○申やゝまゝ」ハ抄本に字補さる亘し○尾をさ

さげ〳〵」ハ按本に役て改つ諸本をゝけてゝをハ誤なるべし○荒籠

う人をのさゝ」ハ古本に役つ諸本のぶきてと字をハ衍なるべし○

鷲の巣に手を差入さゝ〳〵」抄本此十一字を脱さり○物もなしと申

に」此に字无てあゝまほしく聞も然までみて悪にハあゝ〳〵○誰ぞ

のもとかぶるまに」ハ落凹物語巻二に笛の袋縫べき人なゝまバ継母せ

処〳〵特来ゝる処に藏人少将笛の袋逢するに取ふまま人のおぶらるまゝに

ぶとに手もふまるゆゑ〳〵に頻〳〵ひて北方に是唯今縫ゆ〳〵と云へ

ぞとゆゝる意ぞ〳〵能似ゝり。誰ぞ此更ハ為得べきと思回らひに為え

ひ人を不思寄と宣く御自已物しゆゝなり○籠に乃ゝく」ハ抄本に

役つ諸本のゆりて類本入〳〵とゆり○手をさゝげて」ハ健冬さゝげ

ハさし入に誤なゝまと云けまど諸本皆さゝげとある詞に尾を

さゝげ〳〵廻に合てとゆのゝバ即さゝげまゝく宜し○手に平める物を

はる時に云〳〵」ハ類本ゝハさゝりゝる時に云に字无しとゆゝと上裳の段に歩駿

する馬を以て迎へさゝゝ時に云〳〵と同し語勢なり○翁ちゝ〳〵」

ハ此翁とハゝ〳〵まろを宣ふなり彼翁の謀計ふる更なゝバ其

許ゞ云如く貝〳〵る態を為得ふりと悦く翁を喚係く宣ふなり。落凹

物語巻三日夜調度餅名にとぎ調得て悦処に云ゝて嬉し。又常に自誇をた

ふる貌と云ひ さて翁はハ中納言御自を宣つる ○綱を引すぐして
のゝしり思つるまゝ然るハあれん
ハ釣上ふる籠を下さんハ綱を延し遣べきを周章て却て強く
引過るゝ物を障なぐるゝ縄の断切ふるなり ○綱ふるるハ切るな
ひを古く緒糸縄なぐるゝ断切を絶と云ひ ○すがたもちハ類本に抄
本紗なるとあハ悪し抄を按るに一本ちなるもちにてて字なるべ
よき。圓珠菴雑記にすがたもちやどて同意なりとを俗に切ルト直ニ
切ルト其侭なと云すゞの如し。万葉 巻八 大神女郎贈大伴家持歌 涙ゝぎしん鳴之
登時君ゞの家にゆゝと追しハ到りすこの。貫之集に春立すもれるもち
毎ゝ君ゞの爲千歳摘べき若菜なりゝと。續後紀に嘉祥元年七月甲申
因幡國宇倍神奉授従五位下即預官社以國府西有失火隨風飛至府

舍將燔國司所請登時風輟火滅霊驗明白也。谷川氏云晉書載記に登
加罪戮芥隠筆紀に房杜傳登殺用唐律即時為登即時殺之。博物志に
郎日を登日と書ひと云ひ。扶冊子 雪山段 に里おくも明る郎大夏に
ゝ見をゝやる。寄生卷に 宇治の中君中納言に文参らをゝ
びゆるさせ給へるし悦に すなはちも参ゝまほゝゝ侍りしをなど 後ゝ物し給へるを断給ふ詞ゝ 例なゝ
諸の物語書ゞゝに即と云るも皆此意なり ○やゝまはかなゝハ天
智紀 十 に大炊省有八鼎鳴。文徳紀に齊衡二年十二月大炊寮大八
島竈神火武主比命庭火皇神並授従五位下三代実録に貞觀元年正
月大炊寮大八島竈神八前授従五位上ゝあり 八島と云名ハ何なる義の未思得和名
抄 金器類 に説文云鼎和名阿之賀奈倍 三足兩耳和五味之寶器也。ふる古史考

云釜和名賀奈閑一云末呂賀奈倍黄帝造也。燈火類四聲字苑云竈和名加萬炊爨處也

とゝのを今俗釜をも加万と云あり竈を加麻と云ハ釜より出ふる名

空思人あれど然〳〵ぞ古へ釜を加万と云る吏なしと師云ふり○

のちさまに」ハ仰様なり面を上ゝ背を下ゝ墮落ゝ〳〵るなりあゝ腰

を打ゝ〳〵なり伊勢集に「のぢるまに君ゝ負くれし我なれや背なの

合ゝ人のなゝまを

人〳〵ものさましぞのぢるく竈かゝへまれり法国ハたゝめまく

ふしゝゝを人〳〵ものさまに水をすくひ入るまてあるかゝらくして

息出くるまへゝるゝ又釜の上ゝりまゝりはぢるゝてさぐれおろし

かゝらくどもたゝちハいぞぶおぐさふとみへくいきゝ下ゝまくあハ

ゆし於ぶ物ゝれど繻なまをゝ。このゝれあさゝれど子あ貝をふゝ掘

ちまのゝれハるまてゝく於深まるなまゝ先ゝたゝくゝたゝて。此貝かゝ之ま

とゝ物くしゝとゝぶけゝ出ゝまゝ出ゝひろぎゝ於へるに器ゝより於ゝる古

くゝをまるゝれり於へるなりくゝる

○ものさましぞりて」ハ驚ゝる意なり上玉枝の段ゝ委云つ○かゝへゝるて

ゝまり」ハ抱字をかゝ〳〵〳〵いぶくくゝも訓ゝど唯いぶくくと」ハ少

意異なるべし かゝ」ハ搔ゝて掲て抱くゝ〳〵の義なりと周ゝ言の八

衢波行下二段活ゝかゝ〳〵ふゝ〳〵ハ竹取物語ゝ云蜻蛉日記ゝやどのてのりてか

かゝ〳〵物〳〵ゝ楚王夢巻ゝ泣くかゝへりゝ〳〵ゝ於へるなどゝ云

くかゝ〳〵ふかゝ〳〵ふるかゝ〳〵ふゝれと云る見あゝ〳〵ざれどもかゝ活くゝ例

なるも也行二段の活まさかゝ由云と云言のゆと出きり和訓栞ゝハかのゆと思へど狩ゝの活言なるべし落凹物語巻二ゝ部屋ゝ典茉助お言ゝ御代ゝ翁ゝそやまあとかゝへゝきりゝ行り

○御目ハ白眼ゝ〳〵ものゝハ氣絶ゝ瞳の上ゝるなり○御口ゝ水をすゝいゝ入まる」御口ゝ三字今補つかゝふ時面ゝ水吹吏ハ昔も今も

ゝる吏なり此ハ救入まるゝなるべハ必御口ゝと不云ではハ不調水を口ゝ入面ゝ濯ぎバ氣を驚のしゝ蘇生ゝなり伊勢物語五十八段ゝかゝて物いゝゝ病ゝ死入ゝりゝバ面ゝ水ゝ〳〵なゝて息出ゝ云。宇治拾遺巻三ゝ鳥羽僧正國俊ゝ戯する処ゝ僧正ハ例の吏なゝバ衣脱ぎもふゝ例の湯殿へ入ゝえさいのさゝりふすゝと云ゝ湯槽へ踊入ゝのゝきゝにゆくりもゝゝ臥ゝるゝ碁局の足に國俊ゝの入いるなり尻骨を突

ゝ死入ゝ差反臥ゝりけるゝ近ゝ法のふ僧ゝり見ゝバ目を上に見附て死入ゝ寐ゝとゝいのゝと云ゝ寄ゝ面ゝ水吹なゝして息の下ゝ云ゝゝふ此戯ゝハ此ゝ能似ゝり○かゝゝ云ゝハ此ゝ在合ゝる人ゝ甚ゝ骨折ゝゝて息出ゝとなり伊勢物語卅九段ゝ今日ゝ入相ゝのゝ絶入ゝ又の日ゝ戌時ゝとゝるゝ辛じて息出ゝりける菊宴巻ゝ源宰相物思ゝ死入ゝる処に辛じゝ息出ゝ息の下ゝ物云なゝゝ行ゝ○又鼎の上ゝりゝゝさげゝしまる」ゝ行ゝバ息出ゝゝゝ先ハ鼎ゝ上に其侭ゝ人も登て抱なゝきしゝ如聞ゝゝゝ是も綱絶る即と云ゝ直ゝ抱へ水を口ゝ入なゝする方

う語續(タイリツ)けゝるゝ〳〵鼎上より下し(オロ)まゐるハ其より前なりし吏を於
〳〵ゐて語まるなるべし故ゝ辛じて息出ゐて〳〵と云と辛じて御心
ちハいかゞと問と同一時ゝ〳〵辛じてと云(イル)ニなどの〳〵一(ツ)と聞えつゝ然
ゐハ息出ゐて〳〵と句して次の吏を云ばまを於へるゝ〳〵ハ傳写(ス)
ほゞに次文ゝ續うぬをいぶうあてさごの〳〵せし物ゝさげ於ろし
ハ共ゝ同意なる吏を例の重ゝる言なり○御てちハいかゞ於ぶ
ちゝ〳〵とゐて〳〵ハ於ぶやるなりと答於ふと云意ゝ係まり古く
病をこ〳〵ちと云けをど此ハ只御心持なり夕貌巻ゝ某院ゝ〳〵夕皃君絶入ふる処
ゝわをうゐ氣色なり物怖をなんまり於〳〵をさせ於ふ御本上ゝて
いかゝ於ぶさるゝにこの〳〵右近きと四〳〵を此ゝ似ふり○いまゐ下

る〳〵ハ落四物語巻二に女君悩ゐふ処〳〵胸乃痛〳〵伝ゐ於ばと息ゐ下ゝいふ。猶
菊宴巻上〳〵引ふるを可考○物を覺まゐどハ落四ゝ女君唯今更ゝ物なんゐ於
ぼるぬといふ〳〵ゐ於ばゝ〳〵ゐり○腰なんまごうゐをぬハ類本ゝ從〳〵改つ
諸本うとこの於ぬと誤まり。下ゝ御腰ハ折ゝけを〳〵ゐり。和名抄ゝ説
文云腰(モヽ)於霄反或作腰(ヨウ)和名古之身中也。遊仙窟云細腰支師説古之波勢。玉蔓巻ゝ長谷詣ゝ歩疲
ふる吏を足の裏うごこの於ぶ〳〵あり○先ちゝ〳〵さ〳〵て來(コ)ハ抄本ゝ字を
脱をり。夕皃巻ゝ物氣出ふる処ゝ宿直人ゐ〳〵てちゝ〳〵差〳〵糸まと云へと
宣へゞ。宇治拾遺巻九ゝ醜き聟取ふる処にさて面(カホ)ハいかゞ成〳〵ふる〳〵ぞとく脂燭(シヽク)
さ〳〵て人〳〵見於ばゝ。和名抄ゝ雜題有紙燭詩紙燭俗音之曾久。江次第〳〵ハ
脂燭と作をこハ下知の言ゝ〳〵來(キタ)まゐと云意糸まとも同意なり。古今恋四

月夜よし夜吉と人に告やらでこてふは似ふり不待鳴あらん。
小世繼物語に螢の飛ぬるを彼と〳〵こと此童は宣ひけるを
〳〵ぬるを〇此貝の原文を「ハ諸本ちゝくさ〳〵てこの貝と書ふ
バ讀誤るを本居翁上のこハ來まく句〳〵と此貝と讀べしと云遣
さるをきさてかゝふ物に貌などハ云ぼゝもあゝぬ更なるを幼げな
愛親しとて斯のゝまふなり阿陪の大臣は唐國の方に向て何物か
すゝ〳〵て伏拜ひしに似ふる意なり〇御ゝしもゝげてハ卧
なゞら頭をゝ持擧ふまふなり頭を御ゝしと云更古〳〵ハ見え
ぬ此比より更なるべし師云和名抄に首加字倍頭訓同上一云賀
之良と云まど又顧加之良乃加波良髑髏比登加之良なゞもみゝ加

之良と云ゞ正しき名なる美久志と訓ハ凡く貴人のをバ後も加
之良とハ不云で然云めるなど久志ハもゝ髮の更のゝ〳〵けづると云
も髮をけづるなりさて髮をけづる具なるをバ櫛をも久志とハ云歟
其ハ〳〵しけづるとと云べきゝと畧て然云ハ譬バ庖丁ゞなるを
庖丁カなるをやゞて其をも庖丁ゝなるとも云ひ田子の持桶なる
ハ田子桶なるを田子と俗の云も同じさて髮のある処なる故に頭
をもこゝ〳〵しゝハ云ゝかゝべも髮方なり然ハ何をど櫛の名ハ甚古
けるバ此を本まく其を刺処なるゝ髮をも頭をも云形るべし
このゝまを頭を云ハ古語なゝじと記傳巻五云るゝ〇御手をひろゞゞ
ふまゝハ握ゝへる指を起し開ゝへるなり指折を手を折と云ゞ伊

勢物語十五段の歌に手を折てとよめり○燕のおとをおけるを古屎を云なるゝハ屎するを云今も斐太山中人然云屎のまりも是なり又屎尿するをひるゝゝゝゝゝも云ゝ和名抄に痢を久曽比理乃夜方比霍乱を之利子利久智与利古久夜方比とあり。古事記に屎麻理散書紀に送糞此云倶稲摩屎万葉十六に「かゝゝゝゝのうゝゝ苅そけ倉建て屎遠麻禮くし

ゝゝるゝ刀自」此鶯の屎おちし後日数〳〵能乾て平めに成るなり

そ屎をつゝみひゝ〳〵ゝのなこのひなのもぞそとのみまひらるよりぞ思ふ

ゝゝゝゝゝゝゝゝをばかひなしゝゝゝゝゝゝゝゝ

なりにけるよりも人のゆるしほめそしるふまひきたればうれしさやことにまさるよりも人間をつゝしみおそれふかるべしなり

○貝おもしろくたゞと見なひらるに云〻ハ彼古戻を実ハ貝と思ほして爲得(シエ)うれしと悦なひしの其御心持(コヽロモチ)ふかひなるなり○唐櫃(カラヒツ)の蓋(フタ)ハ入れられたるべくもあらぬに云〻ハ蓋ハ底にとゞまりけんをうるさと云言重ふまじ

ハ一ツ脱しうる歌上ハ玉枝を長櫃ハ入られうる如く此も子安貝を取得て赫映姫の許に速(トヽ)送なん料ハ兼て唐櫃を設置なひつるの子安貝を得うれしと思ひ〻〻ハ非で唐櫃の身(ミ)ハ更なり蓋ハ底に入らるべくもあらぬ設置なひつる唐櫃の不用(イタヅラ)なられる由なるべしと云

しを鈴木氏ハ如此(カヽル)物ハ唐櫃ハ蓋ハ入〻送る事と見〻うり唐櫃ハ身を用ゆハ大ハ過ふるべし此外ハ物の蓋(フタ)ハ入〻物する事ども

ハ諸書ハ多く見〻ふりと云なり蓋に物入る例ハ枕冊子ハ祭の比に青朽葉二蓋なる物ども推巻(オシマキ)て細櫃の蓋ハいまを云もて歩行(アリク)

こゝをのしけも續古事談ハ宇治殿平等院造〻荘園多く寄〻なけ

る時所〻乃米を少しづゝ長櫃ハ蓋ハ蒔なるべく云〻などゝ〻ふり。

此もさる事ハぞ有べき。猶按ハ櫃の身ハ大ハ過ふられども子安貝ハ

甚小き物なれば蓋も狂大に過ふりきられど赫映姫ハ其を以逢べき

物なれば事〻しく唐櫃を設置なひうゝて有〻べさて入られなひ

と云ふやいのゝ貝を入なん〻なるべ〻ハ入なひぶべくもこの入らる

ばくもとこの云べく入らぬなふと云くハ中納言病身と成なひ〳〵物
ゑ入らぬなふと云る如く聞ものさぬバ頭書ゑ禁中ゑ〳〵死亡の人
などハ然る（柩の蓋）物なぐに入く出に例の〳〵其故吏（日本記畧の延喜八年夏
雷ゑう〳〵きく夭死をし藤原清貫卿の尸を載半部至陽明門載車と
ある例を出しふちか〳〵ふ例ハ宇治拾遺巻十ゑ藏人式部丞貞高臺
盤ゑ額をあて〳〵死ふるを出に処ゑ殿上の畳なぐ〳〵舁出て出ぬきバとあるを引ふぬど然るハあ〳〵じ腰
折なひ〳〵ハ歩〳〵ハ（ノマミ）得帰なくざあぬバ物ゑ入らぬとこの載らぬなひ
〳〵ハ云ばゑぬど入〳〵ぬなくざるに殊更ゑ然云るハいゑ〳〵若ハ
らぬハさらせときしを誤まるこの此一件猶未うゑく解得ざぬども姑
鈴木氏の説ゑ役〳〵らぬをさせと訓つ○御腰ハ折（レ）ゑけるハ前〳〵ハ
腰なんぐどこのぬぬと御自のゑまあり○いとけふるもざしてハ抄

本いとい本普本いくいけ写本いいけ類本ハ〳〵ハきゑ〳〵ふなど皆
誤まり校本ゑいるけときハ改〳〵るこの必いとゑ〳〵る如く誤なぬバ改
つ此言いとけなしと云るも（なしてふ言ハ意无しはしふなしをきも
ふもちなしをもれとも云ふなひ）
ゑ同意なり。繪合巻ゑ秋好中宮の体をいとおもうのゑく夢ゑもいとゑ〳〵ふ
ふ御ふるゑひのゑ〳〵ばゑ〳〵ぬのゑ〳〵ゑ保の足〳〵ぬふけいでも御〳〵
源君のゆうし心ふ〳〵ゑ御けそひのゑ深さゑぬバ云。赫藤壺（カヤク）巻
め〳〵思ふになり心ふ〳〵ゑ御けそひのゑ深さゑぬバ云。赫藤壺（カヤク）巻
に上東門院十二ゑ姫君の御御のゑきハ云御形をこのしげゑおそしゑ
〳〵ゑ〳〵ゑ幼（ヲサナ）のるはき程ゑいさ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵る吏おく云御さハ
しぬゑて和とゑびさらせぬ〳〵ゑ。昱宮を考ぬバ心をきな〳〵て思慮
もなく物する由なり。いとけく〳〵ハあ〳〵ゑ由を源氏に心ゑくぬと云榮

花よおくなびさせおふくくまくくあらのなると○やむこゝろをしハ病更
をなり。古更記よ 火神を生坐く 病臥在くこゝをやこゝやきりと訓ゝ。尋常ハ
病くハ非で幼き態より爲出ひし病なれバ恥く人よ知きじとち
ふなり○其を病みくしハ腰を折ひし上に人の知らぬ更を心う
痛く恥く病ふあ又其ゞの病となれる由なり○ひよけりハ類本
よ字なし○貝を得そくハ類本貝をもとゝハ衍なるへし○云く
よりも人ハ聞笑ゝ」と九字類本よ脱きり。此より以下ハ上よ云る
更を再委しく云るなり○日よそくくハ日よそひくと云ぶき格の
言なるを歌よも皆のく云例なる更師の玉霰よ委云れり。恥しく
思ふに心日く弥増くいゆゞ病の重くなれる由なり

ゆゝをかゞくや姫きしてみそふひけ
きまくくハ思をくくのよつのひなしとひくハおくと
のくハるを法くきのに
○とふくひよはのくしにる歌ハ諸本やる歌写本にる歌と誤きり。
姫の贈きるを受る方よくく云言なれハ必はのくしにると云べき處
なり上妻問の段よやはゞもとき下よ委辨ふると可考○哥年を經くく云
ハ待を松よ代を貝よ云よせ立よくねの序よ浪と云ゝ。さて松よ名
ぶくふ住吉の詞もてたくるれり。一首ハ意ハ前年ハ毎日毎夜
来通ひくを打絶くく久くく立寄ひそび我ゆのくこて待きべる貝
も无しと承付るハ実くやとなり。古今恋五よ久くくる成よにる哉住

吉のまつハ苦しき物ゝ有ると思ひ作るなるべし

いふとよるたこころちよ所もゝ〳〵人〻所をとるさゝるし

きこゝちよからゝゞて書くるまふ

かひのくもけるものとゝびてゝたあるゝ所をすゝひやふ

きぬとこのたゝるふとゝかゝ入るふひぬ

○いふとよるたこころちよハ抄本心ゝ字を脱きり。次ゝ苦し

きこゝちゝ行る二のこゝちハ唯心持悪なゞ云〻ハ異なり當時病

氣の叟をこゝちと云るゝて弱き病苦しき病ようゝと云意なり。

貫之集ゝ蟻通の哥ゝ詞書に馬のこゝちやとすゝり見たてぬ夢巻ゝ閑白殿

御こゝちいとあしゝ云〻御こゝち猶悪ゝ思さるゝ也ハ御風ゝやなゞと

思ゝて云〻御こゝち増らをゝふ病重ゝ成ゝふなりなゞ云ゝ○哥かひハのゝ

云〻諸本ゝ誤ゝ今ハ抄本ゝ従つ。抄ゝ匙ハ物を救ふ器

なゝバ兼てよめゝと云ゝ。和名抄十四ゝ説文云匕匙早履切和名賀比所以取飯

也。兼名苑云匕一名匙是支反与疵同又音提見唐韻。あり。赫映姫情を懸て歌作ゝ

同じゝふゞの嬉しゝゝバをゝくハ子安貝とゝん〻〻勞をし代ゝハ

此歌を得ゝりと悦ゞ。ゝゝ其情を掛ゝゞ逢叟を聽ゝゝて

よ恋侘ゝ将ゝ死なんゝゝる命も延ぬべきに其を救ひ助ゝるヒハ

斯さぶのよゝもゝを何ゝて救ひゝゝぬゞいのゞ救ゝゝよのゝゝと

なり。師の言葉緒ゝ説ゝやえきぬと結ゝるハ一格なり古今春上ゝ櫻苍春

加ゝる年ゞゝも人の心ゝ飽ゝやえきぬ何〻〻飽ゝぬ叟ゞ飽ゝよ

のしと云意なりと云ふなり○と書そつるとハ下のと字写本ハ従
て補つ類本ハたゞ〳〵とみる宜し。鈴木氏云此と字常言なるなり
吏なり書終と一時ハ云くと云意なるべしと云ふき。按ハ書終即時と
云意なるべしハ上ハ綱なる登時〳〵なる同し語勢なり諸本と字なき
ハ若すれとと云言脱なるもなるんの○絶入ぬるハ息絶ぬ
ふなり。伊勢物語卅九段に云くと讀く絶入けるハ〳〵
こゝをきゝかるやひとあるかしあくまとおもひしらるる
なるすこしらるべしきこゝろハこのひめてこゝハいひいるる
○少しなをと思しけるハ姫を意住く其吏ハ〳〵遂ハ身を亡
しなひけるハあるをと思ふなり○少し嬉しき吏〳〵ハ後ハ言傳

ふる諺の意を云るふハあをと訪歌を作く姫の贈まをしを悦ぬふ
吏ハく返歌ハかひハのく有ける物をと宣ふをを云なり

狩のこゝ

さてかるやひめのもとををとこをみてをとをし
ををして内侍ハ西ふをを子に詔るまふ於ハく此人の女を
いかゝなるしてなのそをあるかるやひとハいのそのうの女
ぞとはゝ〳〵見ゝ奏ふとのまふ
○内侍ハ後宮職員令ハ尚侍二人掌供奉掌侍奏請宣傳撿校女孺兼
知内外命婦朝參及禁内礼式之吏典侍四人掌同尚侍唯不得奏請宣

傳若无尚侍者得奏請宣傳掌侍四人掌同典侍唯不得奏請宣傳とあ
るは内〻の御叓なれバ女官を以敕使〻しなるべし○中臣氏
ふ〻子中臣氏ハ天兒屋命の裔なる〻中執臣氏義大中臣本系ハ高天
原初而皇神之御中皇孫之御中、執持伊賀志拝不傾本末中良布留人
稱之中臣者なる〻に依て此も天皇と赫映姫〻氏中ハ立由ハ此姓
なる人を思寄しなるべし大中臣の姓ハ鎌足公の時藤原と改しか
ども猶中臣金連なる〻と記傳十五ハ委弁〻なり○多の人をい
ふ〻なれ〻て何そなるハ下ハ多の人殺〻ける心ぞとの〻〻
も同し彼五人の人ハ心を尽し身をも亡く恋慕ふとても終ハ不逢
し其女ハ決〻尋常の者〻ハあらじ容儀行狀何ぞのりハ女ぞ見く

叓をして敕使を下しなりいふ〻ハ徒字註ハ空也又万葉巻一ハ無
用〻書て其意なれど此ハ下ハ殺て〻〻ある同意なり実ハ此叓
ハより〻慙ぢしハ石上中納言討なれど皆いと〻き恥を見ぢし
て山ハ隠をなど〻も志ぢひしもなほ凡ハ殺〻と詔ぢひしなり拾
遺ハ何〻なれ〻も云ばき人ハ物もほ〻で身の徒ハ成ぬべき哉伊勢
物語廿三段ハ不相思でかまある人を留の〻我身ハ今ぞ消竟ぬべる
と書て徒に成ハけりと云るハ死し叓を云と
ふと子とうけ〻みのはる〻ふれまと竹とりふれあるかしこまる
〻と志ふ〻〻じいまと〻ハ何〻なれ〻ハ仰ぐふと
かぐ〻や姫のこのみかどい〻に於そなるとよく〻〻家ぎまとし

宮づかへまほしきつるなどまをするとゝ[illegible]ぶかくおぼしたゞ
らせ給ふいとゝ[illegible]

○[illegible]ハ房子彼敕命を奉てなり○かしこまりてハ敕
使なる吏を承て敬恐て請し入るなり○おゝれハ竹取の妻な
と諸本ゝな女と誤りて按本に改るに従て勅使女官なれバ翁ハ
憚て嫗出て受るなり○仰ごとハ勅詔なり○いゝよハ優字の
音師云漢ハイウ吳ハウ或イユなり字書に放充切優〻和也又寛也饒也なゞ行る
意にて手弱やかなる様を云なるにし○於[illegible]なりハと字今補
つ天皇いまゝ赫映姫を見そなはさゞ人傳に聞食し吏なれバ其言
ゝてハいかゞさるべしと字を補て然聞ゝべし○かゝと申侍るハ

嫗敕命を承て其仰吏の趣意如此と姫に傳へまをすなりと字類本に
よりて補つ○いらぬハ勅使の前を退て姫の居所に行なり
かゞるや姫ゝやこの侍使ゝ賞ぜしゝとゝいへばかゞるや姫
よりて取ものあるべいのごとうゝ[illegible]ものとうゝ
あるべのぶとて御使をバいのごとうにきまとゝいへばかゞや
姫ゝてのたまはくこゝにしてのまくむこゝとかしこしと思
ゝべいとゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ハ
あまどいとゝうしげるみちとなるやゝに云けるバゝ
けまるゝ[illegible]

○ゝゝや彼御使に云くハ此上に嫗入て姫の許に来て敕詔を告る吏を

省て直ち姫を催更を語まるなり○よれかゝちもあゝべ」ハ上妻同
段にも能もあゝぬ形をゝゝとゝ○うゝてもろふまふこのれハ古事
記穴穂大長谷皇子と市邊押齒未日出之時忍齒王到大長谷王假
宮段ち王と狩しふまふ条ゝ
宮之傍而詔未寤坐早可白也夜既曙訖可幸獵庭乃進馬出行爾侍人
等白宇多豆物云王子故應慎以上大長谷王の伴人ゝも忍齒王の朝
ち申省文早く催しまふを奇偉ゝゝ思ゝ王
なりゝゝなる此ち似ふ絃ばの字一補ゝ物のゝまふゝ改すゝ思つゝ
ど不然でも能きゝゝ又此ゝハ調も悪ゝ絃ばさて置つ轉の解ハ上
龍首の玉ち段ち なり。姫ゝいゝぐゝろゝゆゝきゝゝと云るをさてハ敕ち違ゝ
あゝゝゝものゝまふ哉と云意を嫗ゝ如此云るなり○帝」の下ち写本
君字なるハ衍なるべゝ○於ろこのに」ハ疎畧なり○かゝゝや姫」の下

抄本の字なり○帝ち召てのゝまゝゝふゝて字ハ必誤ゝ周も故
姑ゝゝ訓べゝ○かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ帝ち召ゝゝてハ奉畏ゝ
違背すゝゝ紀曲を嫗の申をバ姫ハ恐多更ゝも不思ゝなり。又按ち
帝王ち召ゝ后女御ち位に齋の絃ゝ更を結構なる更ゝも不思と
云意なるべゝ此ゝのしゝと云言の更上みちの段ち云しを可考○み
ちゝゝゝなるべゝ」ハ勅使ハ姫を見まして立ゝゝ絃つるを可畏と
も不思など氣障と云ゝ勅使ち所見べゝゝなる様子なり○うゝある
子ち絃ゝゝまハあ絃ど」ハ今ハ字を補つ写本ち あゝ絃とゝハ若下上
ち誤るこの○いゝを心ゝべうゝゝげち」ハ鈴木氏云此ち心耶のしゝと云
るハ俗ち氣ヅカヒナはゆゝ氣ガオケルゝと云ち當絃りと云るゝ幼ち

足養育つれば甚親〳〵我産る子に如くなれども実ハ我子に非ざバ氣にかゝ〳〵嫗に思ふ通ゝ云責もえをぢ〳〵紫式部日記

人〳〵を評する処ゝ和泉式部と云人〳〵面白〳〵書こゝろしけれども口ゝいと歌ゝ讀る〳〵なかりとぞ人〳〵ゝる筋ゝ侍るこゝし恥うしげの歌よとゝや〳〵ハ甚心深き人なるべしバ心置る〳〵寄人〳〵ハ不思ゝなり。夕皃巻ゝ夕皃君死ゝ宣ふ処ゝ尼君ゝそかゝ〳〵支なゞ諫ら〳〵を心をづこの〳〵なるゝ源君乳母ゝ令知〳〵ハ對面〳〵ゝ○おろ〳〵ゝ時気遣ゝ思りんゝなり

そこの〳〵に云〳〵ハ鈴木氏云おろ〳〵ハ疎遠ゝ〳〵親〳〵睦ましかるぬ由なり。赫映姫已ゝ心ゝ不進ゝ常〳〵ハ異にて睦ましからぬ氣の置るゝに搆〳〵居ゝを姫ゝ心の隨ゝ責〳〵ゝ得不勸なり

おろ〳〵内侍のもとに呼出〳〵こゝ此をもゝ〳〵ハ絶〳〵そゝるものゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

云置て其由を下に云るなり　二月七日条にも彼〳〵云ざまし物を
哉彼〳〵も有哉と　とゝも同し語勢なりそちをしき更
言を添て心得べし○此をさなる者ハ赫映姫を云て○こはくなる
者ハ古語拾遺に天鈿女命古語於須女其神強悍猛固故以為名今俗
強女謂之於須志此縁也〳〵て、をゝあれ巻に　槿齋院の更を　故桃園宮にも然
心こゝろ者に思ふ程なりすぐ過侍るしをゝなり今世にも心剛く不
義引を情ごわしと云て○對面すべき此字上にそやなの言な
ん程と受るべし不云格なるべの如し宇治拾遺にもあり
と云ける者ども　此文天羽衣の段に委引つゝも上に其格の言なし下に言を
略する意なるべし○と申に八對面すべきまで姫の言るゝ其を
嫗と受て姫の斯申と内侍に傳ふるなりさ程で地の詞に今一と

まゝに云べきと省ふり○はきに世に住ける人ける程ける
。程なるべ八有なるまや八写本にようけなるべてとなりハ字を抄の異本
に従て補つるけなるべりハ聽と云に同じ此更を下にきくぼくもの
らだにゝなるとはさに云て有なんやハ伊勢物語卅九段に今は翁おとる為
なるまやゝなる同格なりやハやゝ　塗篭本にハ即やゝ　ゝなるべ裏に反る辞なる程
バ兼て出て所見めゝ云意となる程り○謂まぬこゝれたる程ひて
る程ハ上火鼠の裘の段に云つ、まるまひも云る程ひの意なる更上龍首の玉の段に
云つ、猶ひゝりごちまつるべつなど云ハこゝしこゝの約るな
ると云て共に言為の意なり○詞をぞしく云る程ぞ八類本にそぐ
かゝゝゝる。是ハ即國王のゝと云る更るゝ更に斂色ゝ言ぶりを改

く剛く恥のゝむふ由ゝ云成さるゝく恥のゝくと云ずも同かる
ばし。宇治拾遺巻三ゝ本院侍従ゝ係想しけるゝ遂ゝ一度を恥ゝ平仲我なごのゝも世ゝ恥の
ゝしくゝ思ゝくゝしゝるゝと
ゝ結をゆゝくゝゝしてかゞゝやひるきゝべゝるゝ國王の仰事
をそむこのびさや敷しゝ思ひてゝゝよこのゝし
○此上ゝ言多く省略ゝり。嫗内侍の詞を承く又姫の居所ゝ入く姫
ゝ傳ふる吏を畧て直ゝ姫の容躰を語ゝるなゝ○是を聞くハ内侍
の詞を傳聞くなり○はゝてハ本来不承引うゝ國王の權威を以
仰背まゝ由を聞て弥増ゝく心剛くなゝる容体ゝく地の言なり。
内侍の歛色ゝるゝ當ゝるなり○ゝくゝくもあゝゝハ承引のまさ

まなるゝなり。字書ゝ聽他定切聆也靜也受也從也なゝゝくゝる意
ゝく熟く耳ゝ聞く心ゝ承引よしなり○國王のゝくゝや殺しゝひて
よこのしと云ハ違敕の罪ゝハ死を賜ふゝもよしゝり○かゝて此
下ゝ又嫗帰ゝ出く姫ゝ答し言を内侍ゝ申さる吏を畧きり
此内侍ゝくゝるゝゝを考ゝ剛しゝくゝ
ゝゝゝゝ人を敷ゝけるゝゝとゝ沼ゝまひてやゝよけまゝなゝ保
ゝゝしめしゝゝしゝゝゝ此女ゝくゝゝばゝるやゝけまゝ思ゝし。さ
ゝ所のゝゝを考しく於ゝゝゝゝゝゝ迷ゝの結ゝくゝべるかゞやゝ姫くゝまつ
まゝ保ゝるゝよゝゝゝゝしゝゝゝて御使をゝゝびしゝゝかひなく
又ゝびなりにゝるゝかゝくゝゝゝゝくゝゝゝゝゝゝ

○此内侍」このハ輕く添へる言と聞べし○そゝけ」ハ皇國言ゝハまを〻けまゝと云ハ音便なり と云ばまゝと奏字の音よかゝ云ゝ字書よ則候切人臣言事章疏曰奏〻ゝ申り○多の人を殺してける心ぞそのし」此言ハ強くはる者ゆてと云るゝ答ひふやゝ」ハ御言なり上よ多の人ゝ身を徒よ成くゝと詔ひしみ同し○と詔ふるひく止よけ」ハ多人身心を尽ゝて恋慕ふを竟よ不聽過し者なれバ敕命なりゝゝ容易よを承引まじと思食て一度ハ止ひけきどなり類本よ止に作るきを往どゝあり○猶於行しを」おそしはし」ハ諸本をしなし校本に從て補つ類本ハはしもなし再更よ思起しひ〻事謀ひふなり○此女の」を一本よ〻ゝ誤なりを〻ゝと訓べし即赫映姫なゝ○謀ゝや負む〻思食ゝ」ハ上よゆの〻ゝ物と云るゝ赫映姫男に所ゝ〻しゝ〻の謀叟なるゝかゝて彼五人ゝ人ゝ此姫の謀計よ皆負ゝ空しかるゝしよ當て朕ハ負ひをじと強〻思召立ひふなるゝ○竹取ゝ翁を召ゝ」此一句難波人佐野春樹補べきよし云つゝ〻写本よ書加ふるに從つ実よなゝ〻ハ汝ゝと詔ひふ當なゝ〻ひをゝ諸本脱もるゝ傳ゝ〻るなるゝし○聞食て」又御使を賜しのどなゝゝ天皇ゝ大御詔ハ御自己敬言を詔ひふ叟下よ例を引ゝ変云べし○かひなゝ〻ハ態と勅使を立ひ〻し代もなゝ赫映姫房子よ不相見ゝやなゝ○かゝ〻ふゝ〻ゝやゝなゝ〻べきと仰らる」ハ勅命を輕くし疎畧に心得習ゝ〻べきゝ〻ゝ必敕の如ゝ姫を上べしとなり

師玉小櫛巻五云ふいぐしはハ本ふとくしと云ふを音便ゆゑこと
と云なせる詞なりふとくしハ舌ふとて詞ふとてなど云ふとゆ
て直すぐに横さまにゆがめるやうに意なり万葉ゆ徊轉（クワイテン）など書く
曲まる道をふとる道などよめりと云ふき。按ゆ言ふ本意ハさる
吏なるめど俗ゆ打ヤリニスルと云やうの意物を疎略ゆする意と
きこゆ何ゆ吉（ヨシ）のうぬ吏なるバ此言アルマジキなど訳（ウケ）とバ何レ
にも當まるが如し。桐壺巻ゆ帝更衣の卒去を悲しみ歎ふ処ゆ世中の吏をも思し捨
ふるやうゆ成ゆけバいとふびぐしきなりと人の朝（ミカド）より例ゆ
引出さるめ手ゆ伝（ヒト）の朝ハ唐玄宗の吏ゆ政吏を疎略ゆ怠ゆし由なり。夕貌巻ゆ行觸（ゆ）の織
しゆうぬ吏を源君頭中将ゆ宣ふ言に甚ふとふびぐしきなど云ふ

是ハ疎略ゆよしけるとぐいふ意ときこゆ。又源君鳥辺山ゆ物しゆる処に馬ふて物きんと宣ふをふい
だいしゆる吏ふふ思つぶと甚軽ふふ有ゆどき吏ふハ思へどなり。俊陰巻ゆ若小君の失
ふる処ゆ大政大臣（ヒカ）いつこのふ心歩行（アリキ）ハ習ふぞ甚ふぐしき吏なり我心惑（ワ）
ふふふ責ゆふ大臣の心を疎略ゆして父の心を惑ふふ宣ふなり。大
和物語に奈良帝岩手と云鷹を愛しゆし頒ゆふ面を守ふせ
ゆして物も宣ゆふふるいくふふ思しふるなりけるを軽ふふ疎略
召御氣色なり。など諸の物語ゆ多ゆるを考渡して知べし

○竹取翁物語解巻四　三十五

○宮ばらの〳〵ハ天皇の大御前ゝ仕奉を云。然るを下ざまゝも云るハ後の吏なるべし。宇治拾遺巻四ゝ今ハ昔、人の許ゝ宮仕〳〵て在なる侍何ゝなど云ゝ○もてわづらひ侍りハ諸本侍るとあを上ゝそやなる詞なるゝバ改つ翁も嫗も敕詔の疎畧ゝすべこの〳〵ぞる由を聞ゝく云勸ゝでも不承引を甚憂愛ゝ持撹ゝ〳〵を奏するなり。

ハすのくゝと行通らぬ撹し悩むを云なり○さりとも」ハ然有やもなゝ。ゝとも承引まじきさまなるゝども猶改く仰の旨を云聞らむとゝ

り○仰ゝまゝと奏に」ハ写本ゝ仰吏ゝ〳〵。此詞脱字あべし

〳〵仰ゝふやゝ〳〵ゝ申侍ゝと奏に」と補ゝきし」と鈴本氏是ハ古文の簡ゝく妙なる処ゝ本ゝ侍ゝ〳〵然心得べし〳〵云ゝゝ

ゝを聞しゝ〳〵ゝ仰ゝふやゝ〳〵ゝなどの詞ゝ手ゝ侍ゝ〳〵ゝ

らむゝものをいゝまゝせざゝ此女ゝ〳〵ゝ〳〵ゝる拙なゝ〳〵

おきゝゝかゝ〳〵ゝゝとなどのゝ〳〵ゝ

○聞食て」ハ翁の申言を傳奏ゝて聞食上ゝひゝなり○仰ゝふやゝ」

ハ勅詔を奏者ゝ翁ゝ仰下ゝふなりやゝ〳〵ハ類本ゝ従ゝ補つ○翁

ゝ手に」ハ下ゝゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ子ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

ゝゝ。後隋巻ゝ父母の手を別ゝし日ゝゝゝ手なり抄本ゝ脱を

ゝ○於ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ」ハ育を於ゝと云ゝ。万葉巻廿ゝ山振ハ奈塩

都〳〵於保佐年在つゝも君來ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ。帝

も造麻呂の生る子なゝぬ吏ハ知し召ゝ汝の持ゝ侍る赫映姫ゝ

翁の手に生立(オホシタテ)ふ〻むなぐ詔ひくぶと甚く強悍く養父母(ヤシナヒオヤ)に心も從(シタガ)
ふぬ叟ハ未知(イヂシ)らしをきぬあかく宣ふなり○翁ハ冠(カムリ)をなぐこの爲ぐ
せぎ〻ぬ」ハ類本を字を脱きり古板本一写本ハ給せと作ふるハ
よくせと訓べきこの類本抄本ハふぐぐせと作ふり何もよろしし。宜し。
宇治拾遺十一ハ貧女清水寺に願掛ふる処ハ昱を給もく〻御帳の帷(クヾリ)と甚能畳て前
ハ打ひろると見ふ云さぐ昱より外ハふぶぎ物の无(ナキ)よ云云又
はぐろみ入ふる夢に云唯ふ〻ん物をぐ給ぐ〻でかく返し參らす
ふ怪(アヤシキ)叟なりとて又給ぐるを乞る假名書なるハ唯ふぐん物と云一なれど其ハ效く給字皆ふぐと訓
べし〻ひり冠ハ加我布理なるを和名抄ハ加宇布利と有ハ音便な
ど冠賜ふハ五位ハ叙もく〻ふるなり。小世継物語ハ勸修寺(クヮンジュジ)内大臣高藤

公若ひりける時栗栖野の鷹狩ハ急雨にあひく大領官道弥益ぐの家
に一夜宿ひく女ハ逢く産ひし姫君(ヒメキミ)子宇多天皇ハ娶(メサ)て后と
成ひ醍胡天皇を産ひしハ依て弥益をハ四位ハ成(ナ)しひし故
叟ハ例を思べし
翁ハ冠(カムリ)ぐ〻ふ〻〻ぐ〻ふ〻〻ぐ〻かぐ〻ぐ〻ふ〻〻ぐ〻姫にこの〻ふ〻〻ぐ〻かぐ〻なぐ
ふかぐふ〻ハ仰ぐぐ〻ぐ〻ぐ〻

かるゝや姫こそ〳〵いはゝあるとゝやゝ死ものゝ仕まゝじと思ふを
をとゝひ〳〵仕まつるせ死そぐ消うせなずずみつのとかゝふる
けこのゝまつるゝとぬだとのりあるを
○もそゝいハ師記傳十五云専ハ一筋に方よりて他義を交へぬ意なりに
用ゐり全字一字をも訓る皆其意なり○強く仕奉るを死そぐ消亡
なんずいハ翁官位を得まゝ欲て強く宮仕を出し立死そぐ身を失ひ
命をこそも官仕ハきじと思り此を消亡と云るハ常に死更を消入
れど云〳〵異まて實に火の消雪ときもるの如く身體消失と先ロ
立云る意なり下に影のやゝまなり又本の形躰を成なゞせし術ハ
ふと思べし、なんずハ下天羽衣の段を迎に人くまゝどてらんずとをも同

じ未を係〳〵云置言なり、宇治拾遺巻三を本院侍役の許を ハのゝ死遣戸
を開なゞのゝ忘て來にけるとをあて誰の開なゞゝハ出ゝなるでな
ぜ煩ゝ〳〵更に成なんずるまて〳〵帰らず程もまゝまじ云、著聞集巻十に
競馬のことを高遠と國文と定下さ死けり高遠を云、強力の聞こゑを國文ハ
小男无力ゑ者なりけるをバ疑なく取く投ら死なんずと人く思ふり
けるとゝなり○こけこのゝ冠仕奉てハ ハのて宮の巻に源侍役の更をけこのゝかっ
うふとを人と等しく賜ゝうなどをけこのゝさハ官かゝふるとハ位なり
○こ字ハ翁を敬く御官と云姫の宮仕を就く賜ふ官位なる死バ仕奉て
と云と○ちぬだこのゝまれりハ一旦勤を役く宮仕けこのゝはつり翁の
官位ちゝかゝまゝし上とゝく死だこのゝとでとまれり上ゝハ消亡なんずと云

て此てハ常人乃如く死と云改めるなると翁いくあるやうに成たるめるひとのとかくふるまふを見るまでハ何よりのそせむとハあるべきとハ思ひ成ぬ。死なんとすれ共。

○成たるまひてハ頭書に云勿爲ひをなり爲ハ姫の詞ゆ官位仕奉てと有と同じく翁の官位姫の爲る由なれバ成り。先かく云置て次ゆ其由を云る例の文なり。死なんとのり辭を成ふ吏なくバ翁の官位を爲ふ勿となり○はのと抄本ゆ脱きり○何てこのハきゆハハ字写本に從て補つ。翁官位を得ふりても我子を亡くハ代なき吏となり○きハ有てもハ翁ハ猶官位を得ゆほしき執心ある由なると

○なんぢとの宮仕をとゝ成そぎてハ何故ゆ辞を嫌ふぞとなり○死ふべき抄本へき无そ宜き○やそ有べきハそ字抄本ゆ從て補つ。死と云吏ハ有ず。死吏なりと云るなり

猶そこのときてゝ補つ。なんぢやあると見ゆるよるの人のまつ待ぞるしをむなくなりてしこそあるきのふ夕ゆ成むとふとてはのを人ぎやとゝ云べと

○猶虚言歟と云ハ翁官位ゆ執心のて強て宮仕の吏を云バ死計ゆ辞すを虚言のと思召バ宮仕ゆ出し立て從不死で居のと試ゆ実て死べきそとなり○數多の人ゆ志云彼五人を誠ゆ恋慕て甚く志

を尽しみるほどやる空しくなりて不逢し其人に対思ふ心も有更
ゆゑ是ハ只昨今日に浅くこのなる更なり帝の仰更〻〻其に隨着べ
きにあらざるとなり○人聞やさしと云ざ」やさしと云言ハ恥のしに
意などの〻他の上を思ふ自ら心に恥のる〻方を云恥のしと云ハ廣
く我身の恥なる更を思ふ意と聞も或人今俗にヤサシと云ハ優に
雅ふる人を云ざ其意を用ふ万葉巻五に玉島や此川上に家ハあれど
君をやさしみ顕さざ有きと作る歌を松浦少女の大伴卿に對ふ君
ハ都の品高き宮人に於ましまバ其をやさしと思ふの〻我賤しき
家所を顕さざ恥のしと含めふるなりと云ア大秀按に此哥に
て其意を聞も是ざ打任ふハ然ら云難のるべし廣く考るに

に對人に心の却て恥のしと思を云と聞えふり恥のしと云も
心の於このる〻由に云るハ紫式部日記に和泉式部を恥のしげの歌
よこやふハ却ざと云るハ心置る〻歌人とハ不思と云意なる
更上卅の〻に云るを可考万葉巻五に世間を宇之等夜佐之等思へば
も飛立の○つ鳥のしの〻ふ世間の人に心を却るなり古今俳諧哥に何をして
身の徒に老ぬ〻年に思ふ更ぞやさしき身に積タ齢ノ思処が恥カシイと訳さるふ
ア真木柱巻に髭黒大将玉蔓君を語らひ給ひ侍るに今ハ然今更の
本の北方に父式部卿宮の宣ふ言に
〻に人を渡〻てもてかしづのるに片隅に人を扱くて副物しに
ふも人聞やさしかるべし世人に心を置給へふ此に同〻人ふ〻〻ふ此方の恥に意ぞなざなるを
是ア其對方に心を置〻自己を恥る意なるを思べし今に俗意ハ甚

く轉ずるなり。今帝は召よ應ずハ始妻問の段に世おかしく人なるとも深き志を不知でハ逢ぐしと云し心も浅ぐ女御后と齋き傅この姫ぎ以喜べる様なる心根義理の正直ぐぬを世人も欺べけまバ其を深く恥ぐむ由なり今の世おも諸ぎもかふ様なるを襟もを著て憎む同し意ぐなり

翁答ていはく天下おそあるもかるぐ世と存の伺やふさらて大なるふけるなを猥はぐまつるほぐよまをを申とむとて

○伺あとは」ハてんちと作る本ハ悪し天の下と云も悪し○世ぐもかるぐ」ハ全翁の官位おに係る答なをバ世界の吏ハ何様ぐもと云ぐ身ハ尊ぐても畏てもとなり○御命の危さこそ」ハ抄本あやふきぐを宮仕よ出しをてバ不死やあると見おて姫の云を受る答ぐさる吏して試見ずハ君ぐの命に係る大吏なをバ然危ぐふきぐしぐなり○猶仕奉ぐき吏を」ハ類本ま狩ぐ云ぐとぐハ術なるべし。此猶ハ俗ま ヤハリと云意なり○参てぐさむ」ハ内裏ま参てなり

ぐぐりぐてをぐ何のぐふをこのしことを彼もぐはを奈ぐをむとて仕まつまバ宮ぐをぐ」ハ見てなばさぬぐしとまぐに巷ぐ麻ぐごの手にてるまをてる子をてをなのらばむのしぐふまぐ見付ぐるかをバ言ぐをも世人ま不似ぞ

さくふとそそうきそそうに

○仰の叟ハ類本の字なし○かゝることもに」ハ敕を恐畏こ奉るとく疎略
なる為奉らぬ由を申なり○彼ゐゝも」ハ赫映姫なり○參らせむと
て仕奉れぞ」ハ仰の如く等閑なゝに宮仕の叟を種くゝ勸め仕なれ
ぞゝ云意なり○宮仕ゝ出ゝ立なぞ」ハ抄本ゝなをおゝ作ゝ普本同し必
誤なれバ改ゝ補つ。類本出をゝゝとゝも誤なり○造麻呂ゝ手に云く
上ゝも詔ゝなゝゝの翁ゝ手にとゝなり○子ゝとゝも」ハ類本子ゝてハ
しゝ有ゝ役ゝ補諸本子ゝもゝゝ○山ゝて見付ゝるかゝれぞ」ハ按
本ゝ見付ゝ侍るとゝてゝ役ゝ本の仮ゝ聞ゝれバゝゝゝ下ゝ
子にゝ侍りと詞を加ゝ心得べし上ゝ子にゝゝも非ゝゝゝて其意能

聞ゝれバ畧ゝふなり上ゝそやゝて辞なゝゝてゝゝゝ結ゝて下ゝ
意を含ゝる言なる叟言玉緒ゝ変格と云れる類なりかゝれぞを
諸本ゝ付ゝるゝかをハと作ゝるハゝ字一濁ゝ上ゝ着て下を彼者
と云意ゝ取ゝゝゝめゝ此ハ如此有故なれぞの意と聞ゝゝり○こ
ゝゝぞせ」ハ天武紀十一年八月癸酉詔ゝ凡諸應考選者能撿其族姓及景迹
方後考之若雖景迹行能灼然其族姓不定者不在考選之色とあるを
考證に景迹考課令ゝ凡定官人景迹功過義解ゝ景迹者景狀也狀言
狀迹也選叙令ゝ凡應選者皆審狀迹義解ゝ謂考中功過謂之狀也履
行善悪謂之迹也行能考課令ゝ功過行能義解ゝ善悪為行才藝為能
古今物名ゝ「いさゝめゝ時待聞ゝぞ日ハ経ぬる心ぞせをバ人ゝ見ゝ

心アヒ〻訳しふつ明石巻ヨ明石上のさまを聞ける処ヨ事に觸て心ぞせ何りさまなべ〻ぶ〻ぶ有ける哉とゆの〻〻思さるゝもあ〻だ〻なり類本ニハ心操と作ヒ○世ける人ヨ不似ぞ侍るハ變化の者なれバ心さまも常人の如ニハあ〻だ〻となり○奏せるハ翁云〻〻申ける〻〻とよ〻ん由なり

みそのぶと仰ふみそ〻こ〻ろつくこと丁ぶごのぶハ山もちの〻なるヒ御狩ちりまちのみまはまぶ〻に〻つんてまやと沼ふみまハす

○山本ちの〻なりハ諸本ちく〻なりとあハ〻〻の重点を長く引〻竟よくに轉ふるぶヒ故改つ帝大御心ニ推量定〻詔ふよ御命なヒ。拶ヨ斯〻聞ニハすぶ〻若ハ之ちを誤るもの〻〻○御狩の行幸ハ抄本御狩ニとあるヒ校本の〻〻ヨ従つ野の行幸なる〻ふ例なヒ普本類本ニハ脱ちり。行幸を古〻ハいでまと云ヒ古事記ニハ幸行と書て然訓ヒ傳巻六巻十一可考幸字の義ハ續古叟談第二ヨ〻〻ちみまきと云ハ古事記朝倉宮段ヨ天武紀七年ヨ鹵簿令義解ヨ鹵楯也簿文籍也傳に漢官儀云天子車駕次第謂之鹵簿兵衛以甲盾居外爲前導皆著之簿故曰鹵簿と〻〻ふりをこちの紀のち〻と訓ヒ師傳巻卅二云万葉ヨ吾行なる〻も何ぶバ天皇のぶで御行と云べ〻〻と云ぶ〻ち。古ハ雄略天皇四年八月の吉野ぶ御狩今の京ヨ〻くハ交野芳生野など御狩繁のちしを思べ〻〻○詔賜ちに〻ハ帝の御命を奏者をして令宣ふなり。翁の家ハ山本近く在ばぶ〻ハ御狩の行幸ヨ准て〻出坐て赫映姫不慮なる處ヨ到て見ちなる〻〻ともとの御計叟なり。然〻ぶひてハ如何と翁ぶ心を問し

をゝふきのふなるを

こゝろつくしまるつゝの申やういとよくしたゝかなり何うこて詠もなく

こく侍るべしよふふたことゆゑよしてゐ覽ぎ給なるもと要す給ハ

○何の心もなくてゝハ古板本ハ心もとなくゝをハ衍なり。鈴木氏云

何のとハやうのくと云ふ同じと云給ふ。彼是と思慮分別もなく不意

なる処ハ於そし坐く御覽ぎ給よとなり○ふとゝハ俗ニ千ヨットと

云意なる叟上ハ云き○古板本写本に行幸こて御覽ぎん御覽ぎ

給とゝをハ衍なり

立帰ハこのゆゑをさらぶめ〳〵侍猟ハ出給ひ〳〵かゞゝや姫の宮ハ

入給ひて見給ふハ光こるもこけこるもて居る人あと見

なゝ〳〵ゝ於ぶ〳〵ゝ近てよゝを於ふ給ふ袖をとゝく

ふゝゝこ面をふこゝ給ゝとゝふゝ姫よく侍猟じ侍まバゝゝを

ひなく〳〵ゝ給ゝ扨ゝ給ゝ給ひて袖をとゝく於

とゝはゝとゝするゝ

○ふとゝのにハ急卒なり思し立く日數の間もなく御狩ハ日を定

給ふなり○見なゝむと思しこてハ其光ある人と見で赫映姫なるハ

給と推量に定給ひくなり○ちのくよゝ給ふハ此一句諸本ハ漏

もるハ写本ハ從こ補ふ○袖をとゝく給ゝくゝハ類本ハ袖を取く於

とゝ給ゝくゝ行り校本ハ給ゝてゝバゝゝる○於ゝてゝを塞てさふゝゝと」

校本ゝゝもゝゝを片袖もて面を覆ひ隙をしなり○ゝゝくひなくゝをゝる

く於ぶゑさせ給ひくいハ何の心もなくて居る間は此姫の顔貌端
正なく世に比類なく熟く御覽じて御心は能思し知給ひしなり
○ゆるさじとて」此云くとて」云吏下天羽衣の段に云べしとて」
のふまひてと云を略る言なり○なて」ハ引率て大内は還幸まさ
すこと給ふなり
かぐやひめ答くそこに物のごの子い此國まうまを給はべ
らばこそ世のひとのふまひをみくあいなくおそしがくやくべ
給すくそこに
○此國は生給て侍べるこそ云くハ赫映姫此國の人は胎は孕給て生
給なくバ此國王の仰は不違隨ひ奉べき吏なれど我ハ不然で

隨ひ侍べとなり○なておそしがくやくハ卒くおそこんと
すくも然ハえくおそじと申て卒ておそこんとをバ消云その下心
あるよしなり
こかどなどこのさらの物ハ獨なくおそしまそむとて御薬を
よせ給ふ」此かぐやひめきとかぐるなぬをこのおくらをし
と於保せそげよ給ふ人まんの物ぞとおぐしてさらバ
御ふまとなハなくこのじ給ふ給ひね所を見て
だよ御なすと仰られ給ぶかぐや姫もこのさらなるぬ
○などこのさらの物ハ姫の率くおそし難くやと奏する御答なく強
よ辛て於をさむとし給ふなり○此ハ彼の意なり○きとハ俗は手

ヤット　此言ハ便字をはやくと訓る古言の訛ふるまくはやとの約きるなるべしと千村君の泳宮考ヨ言加へ置つるを考べしと云意と聞也。稲直ゴの俗ヨギキニと云意と云るもよし。讃岐典侍日記ヨ局より急ふる氣色みくきとおそしませ三位藤三位殿絶入らを於ひぬと云云云。著聞集に坊門院ヨ年來召はるふ蒔繪師ありけと仰らるばヨ更みくきと參きと仰ふりきまバ。宇治拾遺巻三ヨ定頼中納言云経をはふと打拳て誦ふりけと云小式部内侍きと耳を立ふやくにちふきバなどゐり○影に成ぬハ帝強ヨ率くおえさんと云御輿を寄ふヨ依く今ハ遁ヨ方なくて影ヨ化く形躰を消べくきる形ふ。上ヨ消亡なんずと云るもかくふ術あふバなり。平家物語青山の段ヨ簾承武ゴ霊ヨ顕ふるくを影の如なる者村上帝の御前ヨ參でて唱歌を色でくく仕ると有ヨ同じさはなるべし○たとのかくハ師答問録説ヨ妹ごゐり吾ごゐりと云言ハ如何と道全ゴ問ふく答ふるやくこ此ごゐと云言ハたこのとを約ふるなりたを畧ごがをごと約云なりさてたゐりくハ後撰恋ヨ中将更衣罷出て御文遣しふりふるバ今日過バ死ましく物を夢ふて也何處をたこのと君ハ問ましく返し延喜御製あり。伊勢物語廿段ヨ何處をたこのとも覚ざりけるバなどゐるたこのと同じく其行あて所を云と云ふふ。此を以按ヨそこのとなくと云たこのも同意ふて何処へ行べきとも當所なき更ふく徒然草に云るも何更を書記とも定ふる更なふ意なり然ハ量字議字も本同意ふく定を云バたこのなしと云も定もなく當もなき意を本ふく漸ヨ轉くハ取締なる意本意の不達

意又假初なる意死更すも云ふ此ハ慥ニ取所もなき由なり○こちをしとハ俗ニ残念ナリと云意なり○かぼしての下聊詞脱ちゐる○又ハ姑然訓く在べし○げニハ赫映姫ハ変化の物なる由ハ兼ねも聞食知坐ずと今かく影と成るに就く弥凡人なるぬ更を思食知ずに由なり○さらぬでハ率行ずんんに○きハ影ニ成るあ然計ニ辭となるバ率行更ハ志ずをじとなり○御許ハ諸本御字なしと有るで写本ニ従ず改つ御もとハ御所なり○本の御形と成ずひ絲ハ古本御字なし校本形ニと有り○其を見てぐるぎハ今ハ率く却くなる更かなるバ本の形體ぞニ見く還らはずしと思食よしを詔ハバ影と化ずしぞ又本の躰と成る

ニなるもなる

帝なるほ見ぞでるく却ぐしめをるまをしるめ羅しかく見きつふこやりとまるつひるるるびずきて仕まつる百姓ずに人ニ有るぞしいのしにはをるまつふ

○猶めでるくハ影と変つるぞの再本體ニ成ずバ更ニ改ずに見でふく思食由なり○塞止ぞるしハいのぞで率行ずと思食御心の進ニずひけをるも率行難ずに唯めでるしと思食御心ず塞止難しと云る面白し裏の意ハいのぞると思食心の進ぞの塞止ぞるニ由なり

○かくこをきつふ造麻呂を悦ずニハ造麻呂ニの議て行幸ず更を姫ニ不令知熟く爲却きて帝ニ見せ奉ずるを甚く喜びずニなり○百

官の人〻」は抄本百官人〻に写本百官人の類本百官人〻は字なしなど有〻の字无を今補つ。職原抄は孝徳天皇大化五年始置八省百官なり必百の負數〻は非ども數の多き義なりとぞ。古事記朝倉宮段に一時天皇登幸葛城山之時百官人等云〻とあるは此に似たり然るども此ハ字音は唱べし百官の字ハ明宮鹵簿は仕奉し人〻なり○あるじ」ハ主人と云言なるは轉て主人の礼をなして客をもてなし饗膳を設ル云ヒ○いこのめ〻〻」ハ師記傳卅二云いこのしに嚴重、茂字を書ヒ右三字を合て心得べし物語書どもに叟の壯は大は麗き叟はいこのもしと云る是なりと云ふ

みとのぶとかぶるを姫をみるぶめ〻置ふとはなるとあるべくもを〻しく思しけ思どもみよ〻〻ひを少ぶめてふこともしてなるかつてをおひたるかをむこしよふてはつ〻後にのぐや姫〻

ゆるさるにはかなく物もなく物も深えてそもよ〻ぶもるかぶをやひとも思ふ思ますを

むだ〻はふ下する年ハ強ぬる多の何ハ思ふてなるはもつ〻ます

○赫映姫を止〻」ハ率行すとも為ふ隨ふ〻ハ為便なく置〻還ふをん〻ふふなり○あるべ」ハ不飽不足などは意なり○おぶしけ法ど」ハ帰ふふふと云言へ係まり○魂を止〻る心ち〻て」ハ御製に含ふる意を先此は書顯をるなり。万葉十二は「山菅の不止〻公を思へ

この吾心神之此頃なるのと訓ム。古今雑解ニハ心利下ニハ陸奥飽きたり袖の中
ゝや入ゝりぬ我魂の无こゝちするとゝある此ニ似タリ○於ホ字
輿ニ」ハ諸本御抄本おん」と有るを本字を補つ。大御と云言は音便ニ
轉ずるなゝおんと云も其ゆゑある約まるなり。抑大御と云支古ハ天
皇の御上ゝはと申しのゝ神ゝも甚太尊ニ申と知べし記傳十一可考音便ニ頽くハゝゞ
一通の敬言となれるゆゑ○奉てハ貴人を敬ゝ俗ニメサセニスと
云意ゝ衣車船などに云ヒ。夕見巻ニ狩の御衣を奉ヒ。若紫巻ニ御
車に奉る程。明石巻ニ夜の明ぬゝ前ニ御舟ニ奉ゝてなど有ヒ
○赫映姫ニ」とのゝ云ゝ製て賜ふと云言を省ケリ○哥かゝるふさの
こゝあき」ハ還幸なり。師説ニ行幸を伊傳坐と云語の本ハ出る意ニ云

つゝふるも有べゝなれど必さゝでも唯往ゆゝふるも來ゆゝふるも云ヒ今
俗言ニ御出と云を往ニも來ニも用るも同し意ゝ〳〵なるヒと云
ふゆ此も還ゆゝふハ宮ゝ入ゆゝふなゝバ然云ふべきゝの如なれども右
の説ニ準ゝ心得べし。抑此歌末句を始ニ同〳〵聞べし鈴木氏云背
向て止ゝハ赫映姫帝ニ真ゝ向奉ゝて後の方を向ゝ立止と詔
ゆゝふなり斯ゝ次の詞にいふゝ帰ゆゝて空もなゝと云る能叶ヒ
と云ゆゝ。かゝ天皇の命ニ不隨家ニ止ゆゝる赫映姫故ニ還御の行幸
を物うゝ出立ゆゝひ難ゝ思食て」と詔ひ終ゝ御魂を止ゆゝふ御心持ハ
せゝを詔ふと申意を含てるなり物うゝハ古今春上ニ春立と花も白
くゝぬ山里ハ物うゝのる音ニ鶯のなくゝとゝを師ゝ鳴トモナサウナと

譯さ〻れ契冲法師ハ文集ヨ花寒懶發鳥慵啼とあるを引まゝ字書ヨ懶落蓋切音賴憎懶嫌惡也慵蜀容切音鯖懶也〻ゝのとて字中ヨ有ゝ
ぞも結句ヨ有も同意ヨ〻〻所謂て止ぬ〻止ぬ歌どゝの意を云不盡
言外ニ含〻ゝる拾なり能〻心を著でしさて然含ゝる意を前の詞ヨ
先云置て〻歌〻ハ省〻いてゝぬ文ぬ工甚めでゝし○御返事を」ハ写本
ヨ役〻を字ぬ補ツ帝の御歌ぬ処ヨ赫映姫ヨ〻〻ゝヨ附〻〻〻周も
ゝり並〻ハ文の答を返事と云歌の和を返しと云とさ〻れと伊勢物
語十九段ヨ蝦手ぬ紅葉の甚面白きを折て女の許ヨ道より云やる君
ぞの為手折まゝる枝ハ春ゝかゝ〻〻秋の紅葉さゝるゝれ〻て遣ゝりけ
れバ返事ハ京ヨ著てなんもて来ゝりける」いつの間ヨ移ろふ色の

附ぬ〻ゝ君ぞの里ヨ〻ん春なるの〻〻しと有ハ歌の和を返事と云る此
ヨ同じ。又枕冊子ヨ行成卿餅餤を贈まゝる答〻唯返しをいとゞ〻〻赤き薄様に云〻
自ヨ〻ぞらぬ下部ハ甚まひ〻〻なりとやん見まゝる〻〻紅梅ヨ付
て奉る〻〻ゝハ消息文を返と云と○哥むら〻〻はヨ下ヨも云〻ハ六帖
第六草部ヨ何をんヨ玉の臺も八重葎をふ〻ん中に二人〻〻寢めと伺
る歌の意詞を〻れを帝の率〻おゝさんとゝふゝヨ就て御答申せ
ふや〻自已ハ葎の延繁〻る下ぬ賤しき伏屋ヨも年經て斯住馴佐
し身なる物を今更何〻ヨ玉臺の美麗しき御殿ヨ參〻ぬ更を願ぬ
やとなれと葎ハ和名抄ヨハ本草云葎草上音律和名毛久良〻ゝを万葉四の五十四丁
ヨ年具良布能嶽屋戸介云〻又十九の卅四丁年具良波布伊也之伎屋戸毋云〻

ゝゐさて此六帖歌ハ万葉十一なる玉敷有家毛何将為八重六倉覆小屋
毛妹與居者結句之ノ上ノ脱と有るを詭く傳ふるの第四句本ハ
ゝゐハ必誤と見ゆ然ば延と改つ又生は誤なるべしの
是を帝御覧じて いふ甲斐なきなるゝ なく おぼさ
御心ハ ゝ と 思べ ゝ も 於 ざるけ重 ども ゝて 歌
を ゝ ゝ ゝ べ た も あ ゝ ゝ を ひ ぬ
○是を御覽じて と有るハ返し歌ハ赫映姫口自奏ふるゝと思ど
か ゝ ゐハ物ゝ書て獻ふるなりけ ○ いふ 帰 空 ゝ く い
帝御心ゝ還幸を懶ふ上ゝ又一つ事ゝて弥留ら ゝく思食由に
いふ ゝと云 其ハ此歌を奉ふるを御覧じふる故ゝなり按ゝ彼本

歌の八重葎這ふん中ゝ二人ゝて祢めゝゐを思召ゝ又更ゝ止ゝゝ
ほし ゝ 思成ひ ゝ 玉臺ゝ帰ゝ ゝ も此姫なくてもかひなく思食
ゝ彼歌ゝ共ゝ唱習ふべ六帖ゝ並載ふる葎生ゝ荒ふる宿の恋ゝきに玉と
造ふる宿も忘ゝゐと云歌ゝ意ゝ成ひ ゝ此竹取ゝ賤ゝき宿ゝ
も迫て一夜だゝ御寝ゝして帰ゝ ゝ ゝて夜を更ゝ ゝふさ
ほゝ執成ふる工ゝ面白し心を著べ ゝ ゝて此六帖歌を思し依て帰
難ゝ ゝ ゝ ゝ 由を令知ゝて本歌ゝ詞を皆乍取ゝ唯末一句を残し
ふる ゝ 帝ハ却ゝ其結句ゝ二人ゝて寝めゝと有るを思食 ゝ ゝ いふ 帰難ゝ思
ほ ゝ 由なり斯ゝ赫映姫も帝の本意なく還出ふるを欺ふる意を含
ゝ作ふるゝゝなり空もなゝハ氣を失ひ ゝ ゝ ゝなる処ゝ云 家持

集と云物は天漢帰らぬ空も思ひ〳〵に不絶別と思物にの。明石巻に
天変の条に家を離境を去て明暮安き空なく歎めり。宇治拾遺巻三に
末に虎の難を除肝心失て船漕空もなくてなど有り○御心を云ふ
る処て
なく帰ぬ〳〵きみを供奉せし人の勧めけるさまは〳〵ことみに
きるし○さて〳〵て夜を明しかぬぶきまも。有〳〵孫ぞ」い類本に役て
も字を補つ。甚いまも帰ぬてみしかひ〳〵夜の更るさまは此詞
てきもの〳〵なり
少〳〵はの〳〵まゐる人を見かけ〳〵かるや姫の傍によるべくだ。
有〳〵ぞきてかりこふひとをきふけ〳〵なりと打かしこる人の
かまを〳〵見〳〵あるに見ばバ人をる有〳〵ぞ〳〵やひめとこ傍にに

の〳〵まゐ〳〵ぬ〳〵ひ〳〵るまはすぬ。。。。。なくて。ほ方〳〵るまるまに
みまをそ〳〵

○赫映姫の傍に寄〳〵ぬ。。。。。非ぬ有り」い校本寄べ〳〵もの〳〵有り。師の
玉勝間巻八に此詞の更を俗語に物を競てこよ〳〵く劣まるをそ〳〵
もよ〳〵ぬと云に同しと云ふ。紅葉賀巻に源君と頭中将立並て
ハ花源氏を舞ふ処に深山木頭中将なり。嵯我院巻に仲頼右大将の饗應
る処に夜有て宮を見に
ふや〳〵なる人あり仲頼是ハ此世間に名立ふる九君有て
と思よりて見るにせん方なし云〳〵て家に帰て病
し〳〵思し妻も物〳〵もおぼえ〳〵片時も〇〇バ恋〳〵悲〳〵思〳〵も

前に向ひ居給へども目のもふぶ云々と人より云々と聞に似たり。宇治拾遺巻六に羅刹女を南天竺王の子ふる処に帝御覧ずるに云ふ方なく美つくしし若干の女御后を御覧じ競るに皆土塊の如し是ハ玉の如しなど似たる妻なり○唯獨すましなふハ抄本に従つ。大伴大納言本の妻どもを追拂ふ獨明し暮しなふと有同し意ぞ〳〵なり。宇治拾遺巻九に美濃国の人妻をおくれてやもめ〳〵過しけるぞ〳〵なり。写本に獨すましなふと類本の異なり何り其も宜し。幻巻に紫上卒去の後獨住ハ殊にかゝるふ更なけれどと云々何り類本すぐ〳〵ハ悪し○そしなくて」ハ徒にと云ふぞの如し○御方〳〵なる渡なくて」ハ赫映姫のこ御心に掛まく清らと思し〳〵人ぶる人なも非ぬ如く思して后女御の御方〳〵に御婚すに更もなく常に來通坐けるを今

ハ何に御用なぞなくくハ渡なふ更もなしと形り。幻巻に紫上卒去の後絶〳〵御方〳〵なる渡なくて云々御獨寝に成てそ〳〵なり

かゝるに姫の御もとにて御文をまきてせなふ御をまき

さらぬ顔に帰りて関に加そしなひて於もしるよ木ぶるまきて

て御歌をよみて侍るのそ〳〵

○赫映姫の御許にぞ」ハ外に御方〳〵ハ渡なくて赫映姫にぞ〳〵形り。常に此姫に御心を掛なくて御婚坐ることかなるに迫〳〵ハ御文を通そしなふなり○御返事ハ諸本此に事字なしを校本に有ハ補る

この○さらぬぞ」ハ姫を率往すに〳〵なふ影に成なぞ帝を強顔ふり奉

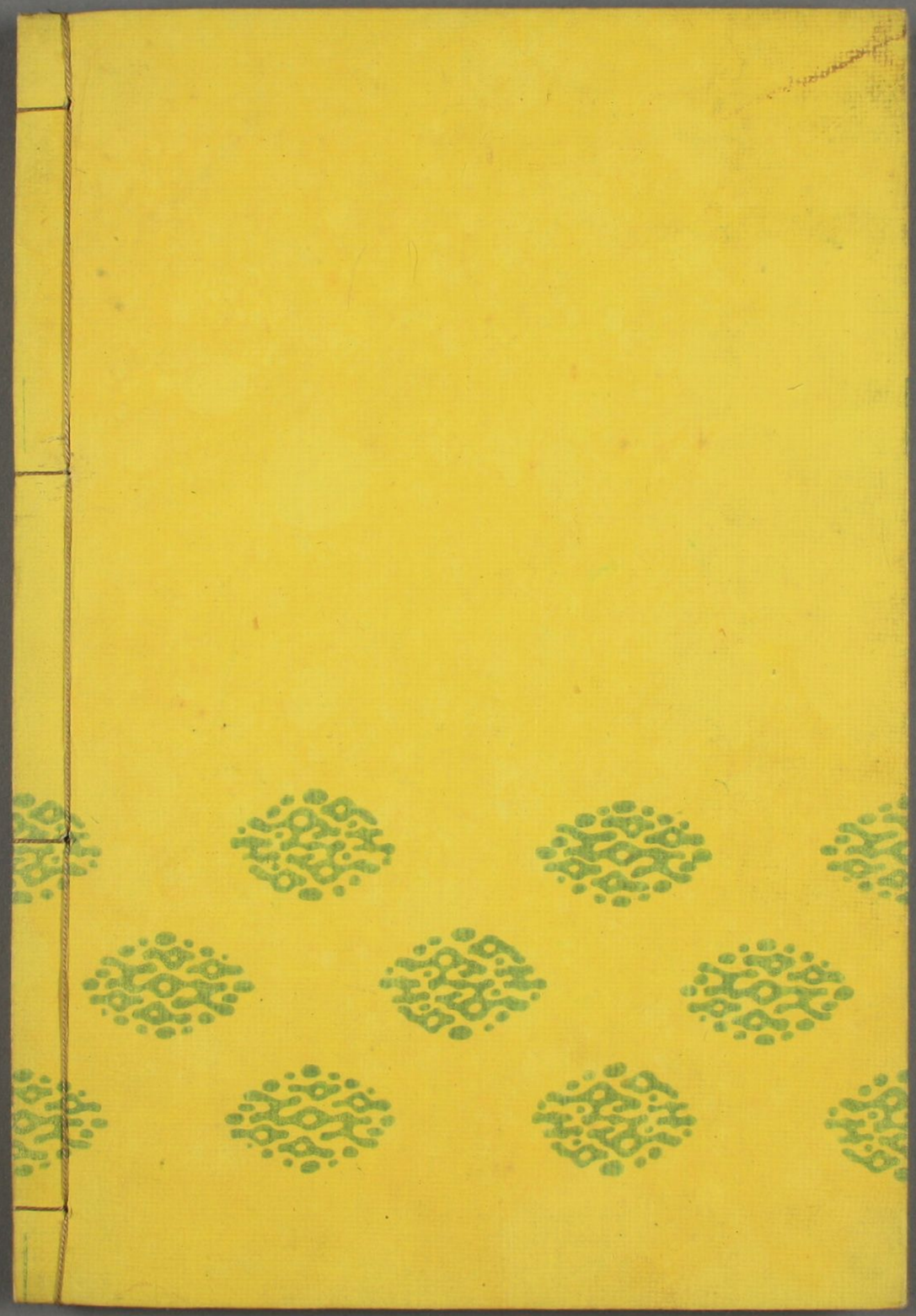
けるぞ〳〵さらぬぞに文通そしなふ〳〵ハ然ぞとのり憎ら〳〵ハもてなしま

らぶ〳〵ゆりさぶごの解ハ上玉枝の段ヨ委云フ○聞えかゝ〳〵ゆひ〳〵ハ
専姫の方ヨ係ヨリ○面白き木草にけちてもハ木草ハ花紅葉ヨよ
そ〳〵もなり。桐壺巻ヨ源君藤壺女御に睦ハヨ処ヨ幼き心ちヨもたゝのなれ花紅
葉ヨけ〳〵ても心ざ〳〵を見〳〵まうことよなく〳〵心〳〵せ聞〳〵ゆ〳〵まバ。蓬
生巻ヨ蓬生君の吏を扨のゞこの〳〵又いとゞ吏なのき程ハ同心なる文通そし
なゞも打〳〵そゝそ若き人ハ木草ヨ附そも心を慰めゆふべ〳〵ゆゝと
云なゞ〳〵なり玉の小櫛二の四丁ヨ物の所ゝ所ゝ云吏の條ヨ春夏秋
冬時〳〵の花鳥月雪ハ類を扨のしきさまに書顕をるなゞ源氏物語の吏なり
是皆人ハ心を動のし所〳〵と思ゝ所る物ヨ〳〵心ヨ思吏所る時ハ
殊ヨ空の氣色木草ハ色も所〳〵所ゝを催に〳〵さゝひ〳〵なるこゞなると

と云ゆ〳〵を思べし諸本みもしろく〳〵を類本ヨ従〳〵改き○御歌
をゆゝてけこのハすハ姫の方へ木草の花なゞにゆゝへ〳〵御製を遣
〳〵なり

追考

○廿四丁右赫映姫ゆゝ〳〵けこのはしに〳〵る歌〳〵ハ姫の贈ヨ〳〵を受る
中納言の方ヨ舟〳〵云言なり。扨〳〵ハ彼方より此方にゆゝ〳〵との
〳〵云をけこの〳〵と云言ハ此方よりやるヨ云ハ已ゞの態を口自云な
ゞ又彼方より贈を受る方ヨても然云ハ即彼方の態を此方ヨ〳〵云
詞なり。後撰恋三ヨ扨ゝやけ使ヨ〳〵東の方へ罷〳〵る程ヨ始て相知〳〵
ゆる女ヨかゝなん止吏なき道なゞで罷ぬるなゞ申て下ゆ〳〵るを

後ヨ敕使を他人ヨ改定ちゝ吏あて召返さるるまバ此女悦なのゝ諸実方へ
問にけるのそしゝりけまバ道ゝ人の志贈て侍ゝる呉服ゝ云綾を
二端包ゝ女の許ヨけるのゝしける清原諸實ゝ綾ヨ恋ゝ有し
あゞ二村山も不越成ヨき此ヨ女の問ヨけるのそしゝと云い綾を諸実よりけるのもしゝと云ゝ又慶賀典侍
明子父執忠の宰相ヨ為ヨ賀し侍ゝふゝ玄朝法師の裳唐衣縫ゝけるの
ゝしゝふゝりゝ侍バ明子「雲別る天の羽衣打著てい君の千歳ヨ侍のそゞ
ちゝえやゝなゞゝをを以さるべゝ」○卅一丁左此をさなき者ハ大和物語菟原
実女の段ヨ親の云やゝう誰も志の同様なゝ侍バ此をきゝれよものなん思煩
ゝゝ侍るなゞと云る今世我子を悴ヒと云同ゝ意ゞゝゝゝゝ云けゝ

竹取翁物語解巻四